

金華山また此地より至るべし。鹽竈より舟を灣頭に浮ぶれば日本三景の一なる松島の奇景は忽ち眼前に映じ来る。松島灣とは鹽竈の灣頭たる千賀浦の東代崎より松島村磯崎を環りて東北丸山岬に至る内海に稱して此の間所謂八百八島の群嶋に接す。眞に是れ满目悉く詩景試にこの間に舟を浮れば風景の變化極まなく人は送迎に疲れて遂に畫中の入たるに了らん。風光の美當に天下の第一勝たるべく衆美歸松島天下無山水の句その偶然にあらざるを知るべし。若し夫れ個々の島嶼に至りては大なるものは山の如く小なるものは岩の如く或は虎の嘯くが如きものあり龍の蟠まるが如きものあり千狀萬態得て記すべからず。而して宮古島寒風澤島はその大なるものなり。みやこ島内裏島化粧島雄島離島經島福浦島等は其の著はれるものなり。

はその名の雅なるものにして、ひるね島子育て島親に勘當裸島の如きはその名の痴なるものなり。浦には梅浦霞浦竹浦溝浦等あり。岬には觀月崎象鼻崎寶珠崎等あり。古來來りて清遊を試むる者多く里人は又七浦八崎八島の勝を唱ふ。然れども八百青螺の灣内豈八勝八景のみならんや、接せる者悉く景なり。到る所皆勝地なり。然れども勝中の勝を探らんと欲せば、遠く舟を艤して宮戸島寒風澤島の附近に到らざるべからず、此邊の島嶼皆怪巖奇石の相倚て成れるもの、而もその配置宜しきに適ひ生ふるところの翠松各趣を殊にして倒まに影を水中に垂るゝもの實に匹を名書に求むる能はず。普通里人の遊子を導くは鹽竈より舟を艤し孤帆に海風を孕ませ松島村に至るにあれど、此の唯舟を行るに便あるのみにして、松島景中の壯觀を盡くせるものにあらざるなり。

要するに舟を艤して灣内を回れば千狀萬態の變化を極めて形勝の優數



へ難きものあるべしと雖も然れども皆局部の景を賞し、一小部の勝に接すに過ぎず。松島の如き面積の廣濶なる雄大の景色は之を一眸に收めて全景の美を賞せんと欲するには、須らく高きに登りて觀ざる可らず。是に於てか松島四大觀あり。

四・大觀とは富山、扇溪、多聞山及び大鷹森是なり。近來は更に是に松島村後の新富山を加へて五大觀とも稱す。富山最も著はれ、扇溪之れに次ぐ。是れ行くに便多ければなり。然れども大觀としては大鷹森を推さざるを得ず。富山は東海道の北松島村字手楢に在り、全山巨杉老榿森然として繁る。この間山の麓より登道を傳うて下ること數町にして、山上に大仰寺あり、南に龍巖寺あり、一望豁然松島十里の碧海は恰も一泉池を觀るに異ならず。八百の背螺點々また指摘し得べし。古來松島の勝を説くもの、松島の北は松島にあり。九年東北巡幸の時には、親しく風荒を狂げさせ給へりといふ。富山に次ぎて名あるものは扇溪なり。

扇溪は松島村と鹽竈町との中間にあり、丘を熊耳峯といふ。峯頂海無量寺あり。その邊磨堂はまた最も名高きものなりしが、前年火災に罹りたりとて今は僅に

茅屋の庵室に片影を止むるのみ。觀望の景は富山の如く廣からずと雖も、山勢二つに分れたる所、灣深く入り、碧潭脚下に廻りて白雲山影と共に水に映し、雲差伍を爲せる島上の翠蓋、綠滴らんとす、寧ろ雅趣は是れに在り。伊達綱村最もこの地の景を嘉みして、屢遊たりといひ、茶亭の跡を存す。外洋の渺茫たると灣内の靜波とを共に相見ると、亦特別の趣味あり。大鷹森は宮古島、大平山上の稱なり。山高く水面を抜き、最も眺望に富みて、四顧悉く佳なり。西北は即ち灣内、白銀盤上、基布星散の奇巒、悉く指點し得べく、四大觀中の隨一なり。若し夫れ眺て眼を轉すれば、山麓は直に外洋に接して、脚下に觀れる白波は岸を噴み、遙かに連る。浩渺たる水色は遠く南溟の雲に接し、東は野蒜港一帯、白砂連りて、山綠相映し、遠く牡鹿半島の髣髴たるを眺むる等、心胸闊大意氣爽然たるを感ずべし。島中また奇勝多く、頗る一日の探遊に値ひす。蓋しこの島と寒風深島とは共に島中居住の民あり。半農半漁を業とするも、風俗質實にして太古の趣を存す。蓋し遠く離れて人衆に交通を絶てるを以てなり。

松島村は灣の中央沿岸の小村落なり。東北は丘陵に圍まれ、其前方は更

に小港灣を爲し、岸に沿うて、旅店、商舖、櫓を列ね、瑞巖寺の大伽藍及び觀瀾亭、大堂、雄島の名蹟皆その地にあり。



蒼

五・大・堂・の・村・の・東・方・水・濱・の・一・離・島・の・上・に・建・立・せ・る・小・堂・宇・に・は・老・松・蟠・屈・し・大・同・年・間・坂・上・田  
 村・麻・呂・の・一・勝・亭・は・村・の・西・月・見・崎・に・在・り・二・短・橋・を・架・上・に・は・老・松・蟠・屈・し・大・同・年・間・坂・上・田  
 潭・あり・し・り・の・観・瀾・亭・は・村・の・西・月・見・崎・に・在・り・二・短・橋・を・架・上・に・は・老・松・蟠・屈・し・大・同・年・間・坂・上・田  
 名・あり・し・り・の・観・瀾・亭・は・村・の・西・月・見・崎・に・在・り・二・短・橋・を・架・上・に・は・老・松・蟠・屈・し・大・同・年・間・坂・上・田  
 跳・望・の・勝・あり・る・べ・し・近・く・た・る・な・り・と・い・ふ・當・り・接・し・遠・く・宮・古・島・寒・風・此・地・素・を・賜  
 る・も・の・な・り・る・べ・し・近・く・た・る・な・り・と・い・ふ・當・り・接・し・遠・く・宮・古・島・寒・風・此・地・素・を・賜  
 寒・く・も・の・な・り・る・べ・し・近・く・た・る・な・り・と・い・ふ・當・り・接・し・遠・く・宮・古・島・寒・風・此・地・素・を・賜  
 庵・見・佛・堂・坐・居・禪・師・の・建・つ・る・所・な・り・と・い・ふ・見・佛・堂・坐・居・禪・師・の・建・つ・る・所・な・り・と・い・ふ  
 松・島・の・地・に・最・も・名・高・き・瑞・巖・寺・は・村・の・西・瑞・に・在・り・後・に・山・を・負・ひ・前・に  
 淵・に・臨・む・一・に・松・島・寺・と・い・ふ  
 淳・和・天・皇・長・五・年・慈・覺・大・師・の・開・基・に・し・て・木・と・延・福・寺・と・號・し・天・台・の・寺・院・な・り・し  
 を・後・北・條・氏・の・世・改・め・て・禪・宗・と・な・し・僧・法・身・を・開・祖・と・爲・す・現・在・の・伽・藍・は・り・し  
 長・十・年・伊・達・政・宗・特・に・名・匠・を・京・都・よ・り・招・き・て・造・營・せ・し・め・し・も・の・に・し・て・四・年・は・り・し  
 に・月・を・經・て・成・上・正・觀・音・を・木・尊・と・し・又・政・宗・甲・胃・佛・殿・堅・二・十・間・横・十・の・間・方・丈・庫・裏・之・れ  
 諸・國・名・匠・の・技・に・成・る・裝・飾・の・豪・壯・に・し・て・而・も・華・麗・を・極・め・た・る・正・に・桃・山・式・建・築  
 の・精・美・と・し・て・美・術・家・建・築・の・賞・讃・す・る・所・な・り・遊・客・必・す・一・訪・す・べ・し

松

て・獨・眼・半・月・を・飾・り・た・る・兜・を・頂・き・手・に・軍・配・を・携・ふ・着・す・る・所・の・鑑・冑・は・主・生・前・常  
 川・の・各・室・の・金・屏・は・三・樂・以・下・皆・狩・野・名・家・の・筆・に・し・て・而・も・華・麗・を・極・め・た・る・正・に・桃・山・式・建・築  
 殿・内・各・室・の・金・屏・は・三・樂・以・下・皆・狩・野・名・家・の・筆・に・し・て・而・も・華・麗・を・極・め・た・る・正・に・桃・山・式・建・築  
 諸・國・名・匠・の・技・に・成・る・裝・飾・の・豪・壯・に・し・て・而・も・華・麗・を・極・め・た・る・正・に・桃・山・式・建・築  
 の・精・美・と・し・て・美・術・家・建・築・の・賞・讃・す・る・所・な・り・遊・客・必・す・一・訪・す・べ・し  
 松・島・よ・り・陸・路・を・迎・れ・ば・北・上・川・口・に・石・巻・町・あり・鹽・竈・よ・り・汽・船・の・便・あり  
 石・巻・町・は・仙・臺・を・距・る・こ・と・十・三・里・所・謂・石・の・巻・街・道・あり・伊・達・政・宗・が・此・附・近・に・長  
 好・の・港・を・憂・ひ・て・修・築・せ・し・も・昔・は・仙・臺・よ・り・各・地・に・交・通・す・る・唯・一・の・門・戸・た  
 り・し・東・北・鐵・道・開・通・し・て・全・く・衰・頹・せ・り・さ・れ・ど・人・口・一・萬・餘・を・有・し・市・街・は・北・上  
 川・に・跨・り・て・風・光・甚・だ・佳・なり・三・陸・地・方・に・通・す・る・東・京・灣・汽・船・會・社・の・汽・船・絶・え・ず  
 往・來・す・る・又・一・の・關・孤・禪・寺・等・に・至・る・北・上・川・上・下・の・汽・船・あり・巡・河・を・過・て・野・蒜・鹽  
 竈・に・至・る・も・の・あり  
 物・産・は・梨・茶・生・糸・鮭・鱒・鱈・金・漬・小・判・漬・等・あり  
 町・の・西・方・門・脇・に・日・和・山・あり・葛・西・氏・の・城・址・に・し・て・今・鹿・島・神・社・を・安・ん・ず・眺・望  
 北・上・川・の・上・流・に・登・米・町・あり  
 石・の・巻・よ・り・東・方・に・進・め・ば・渡・の・波・町・あり・有・名・な・る・萬・石・浦・の・鹽・田・あり・近・來・海  
 水・浴・場・の・設・あり・海・濱・浪・穏・か・に・水・清・く・風・光・ま・た・賞・す・づ・き・も・の・あり・旅・館・五・六



あ。鹿。半。島。の。陸。前。東。部。の。山。地。に。し。て。風。景。の。す。く。れ。た。る。處。多。け。れ。と。道。路。は。崎。嶇。羊。
牡。鹿。半。島。の。陸。前。東。部。の。山。地。に。し。て。風。景。の。す。く。れ。た。る。處。多。け。れ。と。道。路。は。崎。嶇。羊。
海。岸。他。に。其。港。な。き。を。以。て。日。本。郵。便。會。社。唯。一。の。寄。港。地。と。し。て。東。岸。に。至。れ。ば。本。
邦。極。東。の。一。名。山。な。る。金。華。山。驪。忽。と。し。て。眼。前。に。顯。は。る。
金。華。山。驪。忽。と。し。て。眼。前。に。顯。は。る。
所。謂。奥。州。小。田。郡。の。陸。上。一。里。牡。鹿。半。島。の。極。端。に。ある。孤。島。な。り。此。金。華。山。は。往。古。
此。山。突。兀。海。面。を。抜。く。清。泉。を。飛。ば。し。洞。水。砂。を。流。す。山。腹。に。天。女。堂。を。建。つ。土。人。之。
亦。才。天。堂。と。云。ふ。山。に。て。始。め。て。華。金。大。金。寺。と。稱。す。山。腹。に。天。女。堂。を。建。つ。土。人。之。
の。辨。才。堂。と。云。ふ。山。に。て。始。め。て。華。金。大。金。寺。と。稱。す。山。腹。に。天。女。堂。を。建。つ。土。人。之。
り。其。反。歌。に。す。へ。ら。き。の。御。代。榮。え。ん。と。あ。つ。ま。な。る。
是。より。年。號。も。感。寶。の。二。字。を。加。へ。ら。し。め。云。ふ。小。田。郡。を。牡。鹿。半。島。に。合。併。し。
陸。奥。山。を。黃。山。と。改。稱。せ。し。は。何。時。の。頃。に。云。ふ。東。海。大。函。崎。と。
を。摘。ん。で。山。名。に。用。ふ。る。な。ら。ん。か。此。山。の。北。岬。を。二。王。崎。と。云。ひ。東。海。大。函。崎。と。
云。ひ。前。海。波。濤。の。間。に。相。對。し。眺。望。願。ふ。る。所。は。北。岬。を。二。王。崎。と。云。ひ。東。海。大。函。崎。と。
時。と。海。波。濤。の。間。に。相。對。し。眺。望。願。ふ。る。所。は。北。岬。を。二。王。崎。と。云。ひ。東。海。大。函。崎。と。

る。二。里。弱。に。燈。臺。を。建。設。し。航。海。者。の。便。と。爲。す。天。女。堂。は。何。人。の。建。立。せ。し。や。之。れ。を。
詳。か。に。せ。す。多。門。及。び。不。動。の。像。を。置。く。釋。文。覺。の。藏。す。る。所。な。り。と。云。ふ。堂。の。北。に。愛。宕。社。あり。明。
社。あり。大。般。若。一。部。を。藏。す。秀。衡。か。寄。附。す。る。所。な。り。と。云。ふ。堂。の。北。に。愛。宕。社。あり。明。
水。汀。より。此。に。至。る。七。町。餘。な。り。又。海。汀。より。四。十。八。町。に。至。り。龍。藏。現。の。社。
あり。其。東。に。岩。洞。あり。大。匣。小。匣。と。號。す。水。火。の。玉。を。藏。せ。り。又。山。の。半。腹。に。水。晶。輪。塔。
の。上。に。二。大。樹。を。生。ず。其。他。千。人。澤。胎。内。昔。し。雷。擊。あり。て。其。半。ば。を。折。り。海。底。に。沈。む。
の。交。通。は。前。に。記。せ。し。が。如。く。汽。船。片。道。結。川。迄。六。十。八。錢。な。り。復。一。圓。二。十。錢。と。す。汽。船。
結。川。に。つ。け。ば。一。岐。阪。を。上。下。し。て。山。維。の。波。頭。に。出。づ。こ。の。波。頭。の。鐘。を。つ。け。
る。海。峽。に。し。て。金。華。山。に。航。す。る。の。要。津。な。り。水。程。二。十。四。町。潮。流。甚。急。な。り。人。々。之。れ。
を。渡。り。如。く。人。の。食。物。を。典。ち。傍。ら。の。林。樹。より。數。十。頭。の。鹿。出。來。り。て。人。に。馴。る。事。
家。畜。の。屹。立。標。霞。縹。渺。間。海。東。名。嶽。是。仙。臺。千。秋。楓。碧。溪。金。華。句。無。後。人。呼。陸。奥。山。
松。島。よ。り。東。北。線。路。を。一。直。線。に。北。に。進。め。ば。鹿。島。臺。沿。道。に。品。井。沼。あり。を。經。
て。小。牛。田。に。至。る。
東。方。に。涌。谷。町。へ。二。里。即。ち。石。卷。街。道。な。り。又。西。北。三。里。に。往。昔。の。陸。羽。街。道。は。走。り。
て。そ。の。一。驛。古。川。町。へ。馬。車。鐵。道。あり。温。泉。村。八。湯。川。度。田。中。赤。梅。菫。車。新。車。鳴。子。河。原。中。山。及。び。鬼。首。
玉。造。郡。に。温。泉。多。し。温。泉。村。八。湯。川。度。田。中。赤。梅。菫。車。新。車。鳴。子。河。原。中。山。及。び。鬼。首。











前平思何安貞あるた微辨界を置池たる鏡經衡書り  
の泉ば所に頼が任り一慶堂惹せ水るめ函の架しなり  
諸をばに頼が任り一慶堂惹せ水るめ函の架しなり  
址訪誰か時裁前な目立趾其それ羯誰か七る中  
とふかある衣川と安の問も階蕭路の中か年一尺銀附  
全者星菫苔埋むる歴櫻の成道のよ住みほせり  
くは霜の遺址を歴櫻の成道のよ住みほせり  
其ほ變埋むる歴櫻の成道のよ住みほせり  
の毛遷太こ歴櫻の成道のよ住みほせり  
方越寺達急なる歴櫻の成道のよ住みほせり  
向越寺達急なる歴櫻の成道のよ住みほせり  
を寺達急なる歴櫻の成道のよ住みほせり  
異谷窟を歴櫻の成道のよ住みほせり  
に平泉歴櫻の成道のよ住みほせり  
左折忘るべからずと十餘町の

四堂の黒存せ小寺にのれるくに寺歴し覺東  
年の下柱漆しん宇の指高を菫鳥海を代に大奥  
の經句に清は塗細とれ存すを望せ存しの留師に於  
災藏に刻衡各十金見惜正らし。衣川人。由經靈仁二  
には天せ秀二箔來れそ元た猶ほの。杉り藏場二年  
其仁り衡二箔來れそ元た猶ほの。杉り藏場二年  
上元僧衡佛貼ばを年るほの。杉り藏場二年  
層年僧衡佛貼ばを年るほの。杉り藏場二年  
は藤はののし驚保倉將のば蕭々を當時をべ竣二  
燒清更棺部描はく能為康達る寺門さるの殘しへ  
失衛はを部描はく能為康達る寺門さるの殘しへ  
しの脱せけ柱は爲觀覆王の堂の此堂兩北町野火延燒し  
織建とり。彫る堂面皆の股堂の此堂兩北町野火延燒し  
か立とり。彫る堂面皆の股堂の此堂兩北町野火延燒し  
にせ縷。堂面皆の股堂の此堂兩北町野火延燒し  
殘し々堂面皆の股堂の此堂兩北町野火延燒し  
り處釋のし其螺貝の堂の此堂兩北町野火延燒し  
たるして遊芭瓊上珠外か部は今活堂とり落缺と言へば誰か  
層當覽蕉翁に玉外か部は今活堂とり落缺と言へば誰か  
に時者翁に玉外か部は今活堂とり落缺と言へば誰か  
修はをの佛像ひ美面全悉く極め安る七寶  
階背月十美面全悉く極め安る七寶  
加の後雨十美面全悉く極め安る七寶  
へ堂なる降軀を極め安る七寶  
以なる降軀を極め安る七寶  
てり經殘し安る七寶  
今し藏して置る七寶  
日がへとやし七寶  
至武導光寶







田縣境なる白木峠に達す。これより秋田縣横手町へ三里。附近に仙人嶺山あり。

此地は昔鳥谷と呼び安倍頼時の始めて城を築きし所にして、天正十九年淺

野長政九戸に治じ、歸上の時南部信直と約し、其家人北秀愛に此地を守らし

め始めて今の名に改稱せり。

町を花巻町、花巻川口町の二に分ち、併せて人口八千餘を有せり。釜石街道の別

路は此町に起り、高松七澤を經、遠野町に至りて盛岡より來れる釜石本街道に合

す。遠野町に十一里釜石町に二十四里を隔つ。人口六千、釜石町へ八里七町、盛

岡市へ八里十一町なり。交通路の要衝に當れり。志戸平温泉(停車場より

花巻町附近を流る、豊澤川に沿ひて二三の温泉あり。釜石温泉(大澤温泉より湖

二里三町、大澤温泉前の志戸平温泉の上流一里はあり)鉛温泉(大澤温泉より湖

く、猶二里あり。設備完ならずれども、また浴するに足る。温泉に

遊ぶ人は必ず行いて見るべし。大空瀧(二十五丈)阿佐利瀧等の諸瀑あり。温泉に

湯木村大字盛岡にあり。

石鳥谷を經、日詰町に比瓜館の舊址陣岡蜂社(東鑑に記されたる古社にし

て、文治五年、源頼朝此地に淹留すること七日、泰衡の首を檢せし故蹟なり)を見矢

幅の小驛を過れば、盛岡の市街は最早眼前にあり。

盛岡市に入るに先ち、旅客は先づ其前面に巨人のごとく聳立せる一座の

高山を認むるならん。これ、北奥に有名なる岩手火山にして、其形宛として

富岳の如し。これを以て一名岩手富士の稱あり。盛岡市はこの高山の君

臨せる平野の中にある。

盛岡市は岩手縣廳の所在地にして、仙臺以北第一の都會なり。南部氏歴

代の城市にして、元不來方の城と稱せしが、慶長年間南部利直三戸より移り

て、城址を改修し始めて今の名に改む。市坊の數六十餘、東西三十六丁、南北

十八丁、面積二里の二分の八、戸數八千人、人口三萬三千餘を有し、縣廳警察本署



地方裁判所、郡役所、大隊區司令部、師範學校、中學校、獸醫學校、實業學校、盛岡女  
 子學校、岩手女學校、農事講習所等、悉く市内にあり。その建築構造、いづれも壯麗  
 を極む。北上川は、其西を流れて、雫石川と合する處、鐵橋を架す。その長  
 さ七百九十一尺、其他明治橋と稱する巨橋あり。商買擔を接し、百貨相集り、  
 華に於ては、仙臺に及ばざれども、其の富商の多きは、蓋此彼に勝りたらん。  
 陸羽街道は、鐵道線路と相並行して來り、青物町より岐れて、明治橋を渡り、川原町  
 を過ぎて、市内最も繁盛なるところ、に達す。汽車の停車場は、これと反對なる方  
 向にあり、町の北端下厨川村、字木伏にあり。北上川に架したる開運橋を渡れ  
 ば、數町にして、古城址の處に達す。  
 古城址は、清原武則領守府將軍たりし時、其甥宇志方貞頼の居りし處、正慶以後は  
 全く南部氏の居城たり。斷垣敗壁、一々舊時の盛を追想せしむ。城址内に縣廳  
 市役所、地方裁判所(中に、有名なる石割樓あり、廣さ七八尺、幅八尺なる大岩石の中  
 より、一株の老櫻生ひ、茂り奇觀なり)中學校等あり。  
 櫻山神社は、南部家の初代南部三郎光行廿六代南部大膳大夫信直の靈を祭れる  
 處にして、始め城内淡路丸と唱ふる所に建設して、淡路丸神社と稱し、後同所の宇  
 治十三年縣社に列せらる。社の名に改めしが、卅四年再び城址の中央に移せり。明

境内廣潤として、山に接して庭を設け、庭に櫻柳枝を交へ、市民遊覽の地たるに適  
 せり。  
 城址の東南に、中津川流れ、其岸に盛岡公園あり。東西四町、南北三町、中央に小丘  
 ありて、孤山といふ。傍に小池を穿ちて、多く鱒、鯉を養ひ、池畔に一二の亭榭を設  
 けたり。招魂社あり、其入口に觀工場あり。内には櫻樹多きを以て、春風駘落の  
 候、士女來り遊ぶ者陸續として群を爲す。  
 安倍入幡は、大字志家に鎮座せる縣社にして、庚午五年源頼義の勸請するところ  
 にかゝる。本社、中門、幣殿、拜殿、神饌所、神樂殿等に、分ち境内の廣さ、凡そ一萬三千  
 餘坪に及ぶ。老杉鬱々として、人をして思はず、參拜の念を起さしむ。大祭は九月  
 十四日、十五日、十六日にして、近郷より來り賽するもの數を知らず。大祭は九月  
 盛岡の産物として有名なる南部鏡瓶あり。共蓋にて古風質朴るは、其特色なり。  
 織物には、南部縮緬縮緬等あり。されと現今は、木綿織物に重きを置き、多少の  
 成效を見たり。  
 盛岡市は、東北都會中最も振はざるものにして、其繁昌仙臺の脚下に、だも及ばざ  
 るは遺憾なり。  
 旅館は、停車場に陸奥館あり。其他、三島屋高典、杉本、料理店は、三上亭、秀清閣、古田  
 屋、瀬川等  
 此他盛岡の名勝には、三ツ石、見馴松、聖壽寺、報恩寺等あり。  
 停車場を距る三十町餘の處に、安倍貞任の城址なる。厨川橋あり。是附近に盛岡



果樹協会の設立にかゝれを苹果標本園あり。  
岩手山は此附近の名山にして、田頭村字平笠より二里十一町高さ六千八百三十一尺を有せり。志賀重昂氏の日本風景論中に曰く、

早天盛岡市山麓マテ七里を發せば二人曳人力車午餐時岩手山麓なる大釋硫黄温泉に達す夫れより十五町網張温泉に到り此所より山路峻峻山は三區に分れ一山(甲)の上に一山(乙)あり其又上に一山(丙)あり皆な火口の峭壁たり甲に二小湖あり乙に宿泊用に供する小屋あり山頂に岩手山神社あり健脚の者は黄昏大釋硫黄に返り得

大日本地誌に曰く、  
岩手山は岩手火山横列の東端にありて又巖鷲山ともいふ盛岡の西北約二十四軒の所に登え海拔二千〇七十米東方より之れを望むときは完全なる截頭圓錐形をなし其の形富士に似たるを以て又南部富士岩手富士等と稱せり然れども山の四方には二三の小峯相連なり起り多少外形の美を損じ從つて又南部の片富士とも呼ばる。其の頂上は東西に並列せるもの、圓錐より成り、其の東方にあるものは成生の時代比較的新らしく西方にあるもの、東半部を被覆せり。火山にして其の火口内には又更に各々中央火口丘を存す。故に岩手山に二重式火山にして一種の倚肩火山(Overlapping volcanoes)に屬すべし。故に岩手山に先年櫻井理學士深く研究する所ありて其の構造を明らかにせり。氏

は東部の火山圓錐を東岩手火山と稱し、四部を四岩手火山と命名せり。と。  
山麓より山頂までを十合に分ち、一合目毎に石室を立つ。九合目の平地を御不動(火口壁)をたとり、猶少し下れば火口中の低地に岩手山神社あり。眺望は天下の壯觀なり。  
また岩手山を離れて、鎌倉森と小松倉山との間に綱張温泉あり。  
此山麓は牧場多く、其規模宏大なり。就中南麓の小岩井牧場のこととき其名聲噴々たり。  
盛岡市より岩手山の南麓を撿め、雫石川に沿うて秋田縣に至る道あり。  
盛岡より五里、雫石町あり。これより葛根田川を渡る。この川の上流小松倉澤に奇なる岩窟あり。溪流これに激し、風光言ふへかざるものあり。雫石より上流三四里もあるべし。秋田街道は雫石より益々北し、三里にして橋場驛あり。これより仙岩峠を越え、羽後の生保内村に至り、二里程四里ばかりなり。  
盛岡市より陸羽街道を北に進むこと三里、一本木原の平野より國道に岐れ、岩手山の東麓を掠め、一本木大更平館を経て、更に全く西折し、岩手山の北麓を遡りて北を指すの一道路なり。所謂津輕街道是なり。  
此の街道は秋田縣の鹿角郡に入るものにして、要するに荒涼寂寥たり。されど



一度秋田縣に入り、花輪町(岩手縣界より四里)に至り、それより猶進めば、東北第一の鐵業地として有名なる阿仁、尾去澤、小坂等の鐵山比々として顯れ、人はこの山中この熱鬧境ありやと驚くべし。  
岩手山の群峰せる平野は比較的廣濶にして、東方には北上山群の波濤の如きを望みながら、旅客は猶ほ渺茫際涯なき高原に汽車の駛りつゝあるを見るべし。蓋し盛岡市より好摩臺を経て、陸奥の關門中山峠に至る間は、仙臺以北稀に見るの好風景にして、清爽の氣は車窓を壓し、思はず人をして襟を披いてこれに向はしむ。

好摩驛を距る東南十六町、芋田村に駒形神社あり。名馬を得るの神社として土人に崇拜せらる。  
好摩驛の次驛川口驛なり。  
沼宮内町は人口二千六百を有する一名邑にして、昔時沼宮内少輔の居りし處なり。これより國道を北に進むこと二里、中山峠の翠微漸く人を壓せんとする處に、源頼義の古蹟弓卵の清水なり。傳へ言ふ、天喜元年頼義阿部頼時を征討せし時、炎暑甚しく、士卒渴に苦むを見、自から觀音を念し、弓卵を以て岩頭を衝きしに清水

淡々として湧出せりといふ。而してこの一源泉がかの浴々奥羽の野を浸しての長さ七十里に及へる北上川の源なりとは面白からずや。  
中山峠は岩手平野の盡きたる處によりて、北上山群の東より西へと連亘せるその一山脈なり。東奥の碓氷峠とも稱すべく、汽車は幾つとなき隧道を穿ち、小繋川の溪流山嶺を屈曲して、到る處に大小無數の瀑布を懸け、其變化實に狀すべからざるものなり。此地は既に陸奥國に屬し、往昔は此峠以北を奥の細道と稱せりといふ。秋風滿山紅葉の錦を織るの候は、實に天下の奇觀と稱するも、溢美にあらじと思はるゝばかりなり。西行の歌に  
東路のあひの中山ほど狭み心の奥の見えはこそあらみ  
と言ふば、即ち此處を咏ぜらならんか。  
中山驛より汽車は稍下りて、小鳥谷驛に至る。此間山水愈奇に、溪流の鳴る音、環を鳴らすが如し。此間國道鐵路と相交錯し、馬淵川は東より來りて、小繋川を合せ、到處に急瀬を開き、隨處に激端をつくれり。



かくてこの激湍の中を出づれば、一戸町あり。人口二千八百を有し、福岡町と共に此附近の名邑なり。國道は鐵路と相離るゝこと數町、一戸町に入らざる以前、其山中の一嶺を波打峠といふ。往古の所謂末の松山なるもの、險路羊腸たる間に、第三紀層の偽層の痕鮮かにして、其層中には海産介類の化石を含む。巨大なる石窟あり。一戸町を南東に距ること二十七町、鳥越山に鳥越觀音なり。巨大なる石窟あり。汽車は馬淵川に沿ひて、愈々東北に進み、遂に石切村に至りて福岡停車場を置く。停車場より福岡町に至るには、馬淵川の溪橋を渡らざるべからず。而して其距離は二十餘町あり。福岡町は二戸郡役所の所在地にして、一戸町に二里十三町を隔つ。往古安部貞任の屬白鳥三郎高任の城きし處にして、宮城野と稱せしが、天正年中九戸左近將監政實此城に據り、蒲生氏郷、淺野長政、非伊直政、別尾吉晴等と戦ひ、遂に滅され、其後福岡と改めたり、城趾の所在今明ならず、戸數凡六百餘を有し、人口凡二千、郡中第一の市邑なり、町内に梅の古木あり、其名高し、此驛と三戸間に目時、小中島などの隧道あり、一は千七百七十尺、後者は六百三十三尺、此驛と三戸間に目時、小中島旅店は大館、村井。

町の東一里、上野山に水晶瀧あり。又それより一里にして金田一村あり、稍々古驛の趣を爲す。金田一村より問道を右折する一里、大字湯田に温泉あり。之を砕けは蟹、貝、魚、族等の化石を出す。人これを以て現石、筆架等を作り、これを末の松山の化石と稱して旅客に賣く。馬淵川の狹隘なる谷地を猶北すること二三里、名久井岳(千五百尺)の獨立せる姿の漸く車窓に近かんとする北窓を開き見よ、熊原川の一支流北より來りて馬淵川に注ぎ、其の彼方數百の瓦葺の低き谷に横れるを發見せん。これ三戸町にして地は既に青森縣に屬せり。三戸町は南部氏祖先の地にして、其恢業は實に其の基礎を此地に開きしなり。古城址は驛東によりて、其墟今猶歴々として辨ずべし。人口四千有餘を有す。長慶天皇行宮址は停車場より一里餘、各久井村名久井嶽の半腹に在り。相傳ふ南北兩朝の頃八戸氏長慶天皇を名久井の深山に奉じて回復を謀る。新田結城等の諸族之を開き奥州に下る者三十餘名、其裔或は八戸氏に仕へ、或は他土に移り、獨り則ち天皇の皇弟明尊上人の開基する所なり、天皇崩御のとき、末の世に光















馬門温泉は此の海岸あり。狩場澤驛により大湊行の汽船隔日に出つ。此附近は牧畜場多く牛馬の狂奔す。次驛は小湊驛なり。小湊半島は八甲田山の餘脈を走らしめて其の絶端に立岩崎夏泊崎の二岬を作れり。汽車はこの小山脈を穿つに一箇の隧道を以てせり。隧道を出づれば陸奥灣更に左にひろく浅虫温泉の好風景を眼前に見る。

この小湊半島は陸岸多くして険なれど風景のすれたる處少なからず。小湊より浅虫までこの半島一周するに六里ばかりなり。其半島の絶端田澤に椿山あり。湖山椿にして花時は頗る美なり。山麓に椿社あり。傳へ云ふ越前の商賈曾て此村の少女と契り交清頗る濃かなりしが別れに臨み悲嘆に堪へず、再航の日は必ず椿油を携つ來れといふ。明年至れば少女既に病んで歿せり、商人悲哀に堪へず椿三株を其墓畔に植えしに、今かくのことく繁殖せしなりと。浅虫温泉。停車場にあり、傳へいふ昔時圓光大師東國巡錫して、偶々此地に來りしに、一頭の牝鹿温泉中に浴せるを見、初めて靈泉の効驗あるを知り、郷人を諭しず、唯だ布に此地に織るべき麻を温泉に滷して蒸しけるが故に、誰れいふとなく麻蒸の

湯と呼ぶに至り、中古更に淺嶽と改む、泉源は八箇所、則ち椿湯、大湊の湯、柳の湯、湯目、湯鶴の湯等なり、青森縣中尤も温暖の地にして、避寒避暑にふるしく風景亦た東北温泉中に冠たり。旅館には東奥館、海老屋、三國屋、小宮山、田村旅館等あり。温泉にて製する食鹽を其特産物とす。浅虫より久栗阪に至り、唐味棧道（東嶺に所謂宇久井の棧なるものにして、古打て、道路を開く能はざりしが爲め、この海岸の波と稱する珍らしき棧道あり。アイヌ蓋は瀕瀕の名所なり。湯の島を舟にて一周するも面白し。

かくてこの山地を出れば八甲田山の秀拔なる連山は左に高く、前に青森の平野を開き、その西北に一座秀麗にして宛然富岳のごとき山容を認む。東奥の名山岩木山即ち是なり。

青森市は本洲島最北の都會にして、日本鐵道東北線の終端驛のある所なり。これより北海道には汽船の便あり。官線の鐵道は此地を起點として







舍利濱

奥州外か濱にホロツキといふ所有り其海邊に舍利濱あり小石濱なるが其中に  
舍利濱の國修り通る者杯は此天利殊なるあり大サ豆の如く米粒の如く明徹滑澤甚  
樂り圓修り海の中此廣さ五利石をひるひ大に摩信する事なり舍利石をひる事  
此濱の磯余利を深くて沈み居て取あげ古絶えず此故に舍利多しとなり常々舍利  
石水面より餘程深く打破り取あげ事なり此故に舍利多しとなり常々舍利  
難しは黒く珍物なれば余の指の頭程の舍利此邊の漁父に頼めは舍利  
の色は黒く珍物なれば余の指の頭程の舍利此邊の漁父に頼めは舍利  
此の濱に珍物なれば余の指の頭程の舍利此邊の漁父に頼めは舍利  
孕めぬに珍物なれば余の指の頭程の舍利此邊の漁父に頼めは舍利  
凡半道に珍物なれば余の指の頭程の舍利此邊の漁父に頼めは舍利  
内程より珍物なれば余の指の頭程の舍利此邊の漁父に頼めは舍利  
玉の程より珍物なれば余の指の頭程の舍利此邊の漁父に頼めは舍利  
行かぬに珍物なれば余の指の頭程の舍利此邊の漁父に頼めは舍利  
ばれ長き旅路の如き濱近く毎夜三ツかづ守る人も數門戸杯ありは  
はれ長き旅路の如き濱近く毎夜三ツかづ守る人も數門戸杯ありは

(五) 三陸の海岸

志津川町—氣仙沼町—盛町—釜石町—沿岸の風景—宮古町—久慈町

み誰壹人見る事たにも許さまじきをかいる人無き邊地なれば道行人の取に任  
また三腕より西に一嶺を越えて十三湯の方面に赴くの捷路あり  
奥の海岸なり。されどこの海岸記すべきことなきにあらざ、風景またすぐ  
れたる處多し。されど海の怒濤よりも猶險しきは此の海岸の小山脈なる  
べし。到る處只是れ丘陵只是れ陡崖益大の平地あれどもしかも最も  
廣きものにして僅かに一方里に過ぎず。さればこの海岸地を旅行せんと  
欲する者は馬車の便なきのみならず處によりては全く徒歩の覺悟なくて  
は不可なり。



陸前の金華山より濱街道を傳ひ七八里にして志津川町あり。陸羽街道の主路より、小牛田停車場より涌谷を経て至るをよしとす。仙臺より此町まで二十里を隔つ。この町より北濱街道を進めば十里にして氣仙沼町あり。宮城縣下極北の市街にて、人口六千餘を有す。釜前浦の東岸に御島穴なるものあり。洞中鐘乳石あり。春夏波穏かなる時は舟を醸して遊ぶべし。氣仙沼町より三里にして高田町あり。地は既に岩手縣に屬せり。陸羽街道一の關町より此地に至るの路あり。嶺又一嶺、一阪又一阪、昇降の類なる旅客其難に苦しむ。盛町に其中にあり。灣口東西に向ひ、汽船の便あり。日本鐵道中央線より此地に至るの路あり(其條參照)三里、吉濱。五里、釜石。釜石町は下閉伊郡の宮七町と共に此海岸屈指の都邑なり。人口五千五百、船舶常に林立す。市街の西二里に、釜石嶺山あり、鐵を多額に産す。人口五千五百、船舶兩石灣の風光は頗る美なり。此間大槌町、山田町あり。霞露岳は船越半島にありて、其頂上に霞露嶽神社あり。海山の風光一目の下に集る。

宮古町は濱街道第一の都邑にして、人口五千四百を有せり。太平洋通ひの汽船は常に來りて、汽笛の聲を絶たず。字横山に八幡神社あり。これより北山山脈を横りて盛岡市小本村は人口千七百を有する一流村なり。野田村に野田玉川の遺蹟と稱するものあり。久慈町は野田を距る三里、地は既に陸奥國なり。人口四千を有する都邑なり。此の沿岸約五十里餘、陸路は甚た不便なれど、太平洋を往來する汽船の便は常に絶えずして、ことに東京灣汽船會社の蒸汽船は東京より房總の沿岸に出て、この海岸を長く各所に寄港して、この各港に至るを以て海上より見れば、割合は便なり。されど汽船の通するは重に春夏の候にして、冬期は全く杜絶す。久慈町より鮫港八の戸町には三四里を隔てたるに過ぎず。

(六) 福島より山形に至る。

板谷峠—米澤市—龜岡文珠堂—赤湯町—上の山町—高湯温泉—山形市

兩羽街道とは、福島縣山形縣の境界たる板谷峠を出て、米澤山形の平野を過ぎ、羽前羽後に至りて、秋田より陸奥の弘前市に至る街道を言ふ。即ち



奥羽西線の鐵路の添ふて走るところなり。福島の境に蟠れる連山脈を横断せん。庭阪に至りて地は次第に高く願城の福島平野は遠く阿武隈の流と福島市の街とを展開し其上には阿武隈の諸山嶽透蛇をして連亘し眺願る可なり。板谷峠の隧道は其數十四其最初の一を過ぐれば背後の渺々たる風景は全く消えて身は萬山底裏にあるを覺ゆべし。かくて汽車は或は深谷の縁或は山嶺の背と走りて漸く板谷の小驛を得。この山中に五色温泉あり。驛より一里半。峠關の二驛を過れば汽車轟々として下り山形の盡くる處遙かに米澤市の野を開く。米澤市は此の平野の中央に位し、羽前國西部の一都會にして、元上杉氏の

城市たり。市袤百三十三東西一里十二町南北三十町人口三萬二千を有す。土地平坦東に松川を抱き西に鬼面川を擁し、人家櫛比市街殷盛其繁華山形に次げり。市の中央に城趾あり。歴仁年中源頼朝の臣長井某の築くところ後伊達氏の族遠藤信守の居城と爲り、天正中豊臣秀吉之れを蒲生氏郷に與ふ。慶長以後上杉氏に屬し今は公園と爲れり。市内百貨の辨ずる處を立町粕町大町と爲し、古來養蠶機業に盛にして米澤織のごときは殊に著名なり。市内觀るべきもの公園の他林泉寺、佐氏泉公園(廿五町)あり。又西北一里餘成島村に成島八幡社あり。寶龜八年草創の古社にして坂上田村麿の祈願なり。この附近温泉多し。米澤市は工業商業活潑なれど、上杉鷹山公の遺教行はれたるを以て市民概して勤勉にして奢侈に耽ることなく、町の最も繁華なる處にも茅葺の屋多し。これか爲め、仙臺山形に比し、外觀甚だ寂寥たり。米澤織の沿革は安永六年藩主が其臣廣瀬彦助なるものに命し、組織等を始めたるに基因す。販路は東京、京都、大阪、北海道地方を其重なるものとす。



市の西北一里にする成島八幡宮は寶壽年間大伴將軍の建立にして阪上將軍の再建を稱せらるる古祠なり。

市の東北三里、福島街道に高島町あり。人口四千餘、此附近有名なる古墳あり。

龜岡文珠堂は、米澤の次驛棟の目より一里を隔つるに過ぎず。春日作の文珠菩薩を本尊とす。堂宇壯麗なるは比隣稀に見る所、又堂側に古櫻樹あり。其幹の皮に虫喰の跡を存し、其快恰も文珠菩薩の奇獅に駕するさまに似たるを以て俗にこれを虫喰文珠と稱す。

國道は米澤より犀代川を渡りて直ちに赤湯町に達す。

赤湯町は人口三千六百を有す。地に温泉を湧出し、一小繁華地を爲す。鹽類泉にして旅館は港屋、堺屋、大和屋等あり。町の西北に城址あり。二色根と稱す。

町の東北に赤湯沼あり。一名白龍湖と稱し、鮮魚及び葦等を産す。

宮内町は國道より北に入る一里、最上川沿岸に通ずる要路に衝れり。人口三千。

國道を一直線に東北に進めば、米澤平野と山形平野との間に中山峠の一小山脈あり。翠嵐搖曳してや、趣に富めり。南村山郡界の一小嶺を越え、前川の潺湲たる流に沿ひて下れば、先づ上の山町を得。

上の山町も亦温泉地をして有名なり。會津の東山、庄内の湯の濱と共に三樂園

の稱あり。人口六千。市街は街道に添うて發達す。泉質は鹽温泉にして、市街の一部高き處湯町の北、日枝神社の傍より湧出し、旅店は全く寛を以てこれを引く。旅店に瀧澤屋、龜屋あり。宿料一日平常六十錢位。城址は市街の上にある。眺望よし。今公園となりて、月間神社あり。停車場は町の東端にあり。又字十日町の一丘上に湯上觀音あり。

東奥の草津の温泉とまでたへられたる高湯温泉はこの停車場より赴くを順路とす。國道を東に入ること三里、醉川の上流、蔵王火山の爆裂火口壁たる龍山の南麓、堀田村にあり。東南北の三面は山を以てこれを圍み、西の一面山形平野に對す。泉質は酸性泉にして、硫氣の盛なる附近に其比を見ず。癩病、癩毒、腺病に宜しく、ことに小兒の諸病を醫するを以て有名なり。三代實錄に既にこの温泉の名あるを見れば、その發見もまた甚た舊きを知らべし。村の後方高所にこの温泉あり。又一遊するに足る。旅店數十戸、いつれも大なり。宿料五十錢乃至七十五錢位。

蔵王火山は直立凡そ二千米、この地より登路、三里、山頂に沼あり、御釜、蔵王沼といふ。所謂火口湖なり。

上の山町より再び汽車に乗じ、益々北に進めば、山形平野は次第に展開せられ、其廣潤、米澤平野に倍せるを覺ゆ。

山形市はこの平野の中央にありて、其地形の良好なる、遠く仙臺、盛岡、青森



に鉄く。弘前の一市稍々これと趣を同うす。縣下第一の都會にして道路は四通八達天童上山寒河江の諸邑に接し實に縣下の中心たるに負かず。戸數五千五百人口三萬五千餘を有し山形縣廳あり。此地は元最上と稱し、後山方と改め、中古山縣に作り、近頃山形の字を用ゆ。國司葉室光顯を亡し、最上氏の祖斯波兼頼の此の地を領せしは實に建武年中のことに屬す。徳川氏に及びて鳥居保科の兩氏これを領し、爾來封を受くるもの松平奥平堀田秋元水野等の數氏あり。停車場は市の西端にありて、陸羽南線の鐵道は市の西部を掠めて走れり。山形城址は市の西部に位し、今は歩兵第三聯隊あり。山形縣廳は市の中央にありて、三層の大厦なれども、其の構造甚だ古くして且つ劣れり。その前なる大路の東に山形縣物産陳列所あり。其他、山形師範學校、山形中學校あり。就れも壯大なる建物なり。市中般盛なる地を六日町旅籠町七日町横町三日町とし、銀行諸會社及び商賈旅籠等

多く此處にありて、百貨の辨ずる處とす。殊に此の市の特色は商賈皆類を以て集りたる事にして、塗師町に漆器商多く、桶町に桶商多く、旅籠町に旅店多く、其の他、材木町、蠟燭町、鍛冶町、銅町等皆然らざるなし。而して五日町、八日町、二日町、三日町の稱は、皆な市場の立ちたる日を以て町に名けたるものに似たり。鐵砲町には縣社八幡神社あり。大なる六株の榎樹あるを以て、一にこれを六榎入幡といふ。七日町の光明寺あり、最上氏の始祖斯波兼頼の墓あり。三日町の光禪寺には最上義光の墓あり。專稱寺は七日町宗寺町にありて、其間、間の猿の彫刻は有名な千歳公園は市の東北、藥師河原にあり。元、柏山寺の境内を以てこれに宛てたるもの、馬見崎川、其東を流れて風景凡ならず。藥師堂は園の中央にありて、草創は頗る多く、天平年中、聖武天皇僧行基に勅じて、一國一字の國分寺を創立したるもの、一なり。毎年四月八日の大法會には、賽客遠きより至り、境内殆ど立錫の地なきに至る。市、東に千歳山と稱する小山あり。眺望甚だ佳なり。阿古屋松の古蹟あり。園内熊野神社の傍に眺望臺あり。眺望甚だ佳なり。これを望めば、形、劍、壺の











湯殿山へ登るには、天童町より汽車を下り、西根の地に出て登峯するを近道とす。月山に登るには、山形平野より汽車を下り、庄内平野より登る順路とす。(後條参照)

此の偉大なる山容を左に仰ぎ、最上川の清流に俯しつゝ、兩羽街道は汽車の線路と共に一直線に北に志し、頃刻ならずして楯岡町に至る。

楯岡町の少し前を右に入りたる所に、東根町あり。最上唯一の名城として名高かりし地、流石の最上發光も此地はかりは攻落すること能はざりしといふ。町の東北隅に入幡神社あり。

楯岡町は七千五百を有し、市街整正、人烟稠密なり。町を西に距る二十町、最上川に基點橋と稱する大橋を架せり。河口岩石點々、恰も基石を列するに似たるを以て其名を得たり。

汽車は本飯田より少しく北に迂回し、次第に最上川に近づき、大石田に其

過すと。

拜し、湯殿山の神體として隨喜湯仰の涙に咽ぶものは實にこの岩塊に外ならず。羽黒山は月山の北方、手向村の東方に在り。月山、湯殿山と相並びて、風に羽前の三名山と稱せられ、道者の信仰頗る厚きものなれども、高さ僅に三百六十米に過ぎず。第三紀層より成れる臺地狀の山にして、地形上敢て著しきものにあらず。

即ち此の山脉は、月山これが主峯にして、餘は實は其の驥尾に附するに

の停車場を置けり。

大石田は最上川の河港とも稱すべく、交通の便を一にこの水路に由りたる昔時は、例の川舟の發着所として頗る繁盛を呈せし港なり。今も川舟あり。されど最上川は日本三急流の一なる上、水の増減によりて舟路時々杜絶するを以て汽車の開通せし今日はあまり多く此舟路に依るものなし。されど最上川の風景を悉く探らんと欲せば、此舟に乘して、悠遊庄内平野に至るを要す。

尾花澤町は兩羽街道の上において、大石田より南に一里、人口四千を有せり。此地は縣下第一の積雪の地にして、嚴寒の節に至れば、一丈餘の深さに達す。實方中將が陸奥の歌枕見にまかりて、人九の詠を石に刻みし古碑は、同地柴崎氏の園中に存す。一訪すべし。

尾花澤より舟形町に至る途中に、猿羽根新道あり。

舟形町は人口二千に過ぎざる小邑なれど、庄内地方に赴く要衝の地に當れるを以て、百貨幅濶す。又此町より東して陸前玉造郡に達する路あり。途中三里の處に瀨見温泉あり。又此町より東して陸前玉造郡に達する路あり。途中三里の庄内地方に赴くものは舟形驛より下車し、車を備ふべし。最上川の山中を横断して、清川町まで七八里あり。途中に本合海町あり。最上川此の町の西を流れ、風景よし。(後條参照)

舟形町より北すれば、羽前羽後の國境に蟠れる鳥海火山群の翠微漸く近



く晴日には鳥海山の偉然たる姿を望み得べし。新庄町は一小平地の中に  
ある都邑にして山形以北第一の都會なり。

新庄町は山形市より十六里、人口一萬二千、新庄城址あり。町内見るべきもの、戸

これより羽後の國境まで四五里、金山と稱する一小驛あり。杉峠の麓に

及位村と稱する集落あり。

更に舟形町に戻り、新庄町よりするもよし、庄内街道を進まん、本合海町

に至るまでは、廣瀨たる高原にして、葉山、月山の姿を左に、鳥海、火山群を右に、

氣象自から瀾大なり。峠を下れば本合海町あり。最上川は町の西を流れて

谷を西より東に流れ、其山中五里餘、風景頗る旅客の思を惹くに足る。

最上川の奇勝は此山中にありと評ふを得べし。ことに、此川の色は、兩岸の山  
脚相迫り、その狭き處は十四五町に過ぎざるに拘らず、川は純然たる大河の趣き  
を爲し、水は溶々と深潭を爲せる處少なからず。殊に、笹帆を擧げたる舟の  
絶えず上下するは、此川ならでは見られぬ處にして、宛然南宗の風景畫を見るが  
如き思ひあり。本合海の渡頭の前には、向山と稱する、白灰色の奇なる絶壁あり。  
松樹二三其間に點綴せられ、風景幽か如し。川を渡れば、如蔵村等の村あり。  
衝に當れるを以て、往來繁く、此間の道路、今、庄内、野と最上、平野とを連絡する要  
清水に白き素麵を浸して、旅客にすゝむるなど、何となく昔の名所園給中の挿畫  
を思ひ出す。山中に入り、大瀧、東瀧等の奇を見、外川村に至れば、山  
愈奇にして、愈々遠なり。此岸に仙人堂あり。これより二里にして、草薙に至る。  
對岸に白糸瀧あり。氷の増減に由りて、其姿を異にすべからざるも、及び、  
殆ど山の頂より落下する。増減に由りて、其姿を異にすべからざるも、及び、  
本邦瀑布多しと雖も、此瀧のごとき趣を呈し、嬌態實に見ざる特色あり。

の山と平野との間に清川の一驛あり。頗る山影雲影に富み、風情忘るべか

らざるものあり。











華の十の一をすら保つ能はずなりぬ。況んや明治二十七年の大震災以來  
町は未だ舊觀に復せず最も繁華なる處にても影低き茅葺屋根を交ゆるを  
見る。人口二萬郡役所裁判所病院等あり。町を東より西に横斷すれば、日  
枝神社及び日和山公園を有する一丘陵長く連り上に風情番ならざる松樹  
亂立す。

日枝神社は其松林の中にあり。堂宇宏社なり。其丘陵の上に碑あり。土蔵木  
間菜か天明年間風砂の患を除かんと北風高く怒濤を捲き松樹を植えたることを記  
す。蓋し此海岸は冬季に至るや西北風高く怒濤を捲き松樹を植えたることを記  
る砂は殆ど天地を晦冥ならしむること往々にして是ありしなり。橋南溪は東  
遊記に吹浦の砂蹟と題して酒田より吹浦に至る間の風砂の甚しきことを記せ  
り。此間五里今も荒涼として人家なけれど路傍に松樹を滿栽したるが爲め全  
く其憂を除くを得たり。この松樹の茂生せる丘陵の間を左に下れば日和山公  
園あり。眼下に最上川の海に注ぐの光景を開き大洋の間飛鳥の青螺の淡と  
して無からんとするを見る。この公園を下りて一廓の人家あり。門を入れば  
絃歌の聲湧くが如し。この公園を下りて一廓の人家あり。門を入れば  
其他町内に泉流寺、林昌寺等の古刹あり。

酒田町より羽後に至るの街道は町を出て、一直線に北を指しかの風沙  
甚しかりし藤崎の地を過ぎて吹浦に至る。鳥海山の山容は愈々近く山雲  
搖曳して旅客をして一種名状すべからざる快感を起さしむ。  
加茂港より長く續きたる平滑なる沙濱は漸く是に至つて盡き鳥海山の  
余派の末端海中に入り、此處に奇岸怪石を以て満されたる海岸をつくる。  
吹浦町はこの沙濱の陡崖と相接する下方にありて、鳥海山に登拜する大物  
忌神社の一の華表は街頭を壓して立つ。この吹浦の海岸に羅漢岩の奇景  
なり。

吹浦町は人口三千を有する小邑なれど、夏時は鳥海山登攀の行者陸續として  
至り街頭頗る繁華を極む。  
羅漢岩を訪はんと欲せば、吹浦町背後の丘陵を登り、十町ほど行けば、丘陵は更に  
海岸に盡きて前に海灣の盆涌して、松樹亂立して、松瀬濤聲と相和し、聲の聲既  
丘角に一茶亭あり。茶亭の背後は松樹亂立して、松瀬濤聲と相和し、聲の聲既  
に尋常ならず。この間を迂餘曲折して下れば、三四町にて海嘯に達す。奇岩怪



石十數町の處に亘り、怒濤これに當つて碎け、奇觀極りなし。ことに、此磊々たる  
 奇岩の面、大小無數の羅漢を刻し、訪ふ者をして一種奇怪の感に撲たれしむ。海  
 濱に望樓あり。この地方に遊ぶものは、必ず一訪せざるべからず。酒樓浴會海に面し、風  
 この海岸路を猶北に進むこと二十町餘、湯の田温泉あり。酒樓浴會海に面し、風  
 景よし。鳥崎、女鹿を経て、鳥海山の餘脈たる觀音森三ツ森の時に至れば、其中央に秋田山  
 形兩縣の境界標あり。  
 鳥海山は本邦に於ける屈指の名山なり。吾人竊かに謂らく、古奥州名山  
 多しと雖も、此山の如くしかく崇高に、しかく雄偉に、しかく風物に富みたる  
 ものほあらず。岩手、岩木、月山、皆名山たるの資格ありと雖も、しかも此山の  
 如く群峯來り朝し、小嶺相從ひ、宛然絶世英雄の資ある帝王の如く浩蕩たる  
 大洋に面して立てるものはあらしと。蓋し本邦に於て富嶽に次ぐと稱す  
 るも決して過言にあらざるべし。  
 鳥海山を遠望するには、酒田附近を第一とすれど、郵船會社の汽船に搭して、これ  
 を海上七八里の處より望めば、山容殊に美にして、脚下に群峯を帥ひたるの光景、  
 思はず人をして快哉を呼ばしむるものあり。又羽後の本莊町なる子吉川の橋

上より望むも、其山容近くして甚だ佳なり。  
 志賀、羽川氏の日本風景論に其登攀のさまを記して曰く、  
 酒田町より五里六町にして日本海岸なる吹浦に到り、此所より登山するを以て  
 最も便利とす。全山輝石、安山、石より組成す。酒田町より吹浦の間に到りて登  
 る此所の鳥居に達す。此所より山徑峻峻、登ること一里半にして、陸夏雪を看る。雪  
 を踏む一里(里稱大雪路)鳥の海邊、是れ火口の海邊、拜殿に詣れば、人は第一火口の峭壁に立つ  
 眼下に鳥の海あり、是れ火口の海邊、拜殿に詣れば、人は第一火口の峭壁に立つ  
 後(小雪路)第二火口の峭壁、内に入り、消氷雪の湛へたるもの、夫れより積雪を踏  
 の境、西に限れる新山は、鳥海山の最高點となす。頂に登りて四望せんと、東には陸羽  
 走し、西には日本海、浩渺として、男鹿、牛島、飛鳥、粟生、島佐、渡瀬、波香、漢の間に點綴し、  
 南には、最上川の日本海、浩渺として、男鹿、牛島、飛鳥、粟生、島佐、渡瀬、波香、漢の間に點綴し、  
 は、拂曉其の圓錐形なる山影、日本の海に倒映する。是れなり、大陽の昇るや、其影疾  
 く、縮するを以て、此の景象を看んとせば、一夜を本社殿側の小屋に明かすこと  
 可、文人畫師たる者、必らず登臨せん哉、「大小雪路」の間に、白花の奇草ヒナザク？  
 テ、フカイフスマあり、其他奇異の植物少からず、植物家亦登臨すべし。

八

羽後國院内より秋田市まで

院内町 御物川平野 横手町 大曲町 角館町 田澤湖  
 秋田市



羽前國新庄町より秋田市まで其里數約三十五里餘東方には北日本脊梁  
山脈の眞盡山脈重疊し西方には鳥海山群の支脈次第に陵夷して幾多の丘  
を御物川の大谷は其南境より發してこの兩山脈の間に擴がれる平  
野を南北に貫流し其處に院内湯澤横手大曲花館等の諸市邑の發達を見る  
而して此等市街を連珠の如く貫けるは兩羽街道の幹線にして奥羽西線の  
鐵路も已に此間を駛走せり。この本街道の支線には湯澤より東南陸前鬼  
首に至る鬼首街道湯澤より西北陸中の黒澤尻に達する平和街道六郷大曲  
より東北角館を経て仙岩峠を越え陸中盛岡市に出づる角館街道等あり。  
此等街道には昨年迄汽車の便なかりしか爲め馬車人力車の便自づから發達し  
兩羽街道のときは馬車の便の外に人力車に乘替の制を設け車夫の無法の賃  
金を食ふものなく街路また平坦にして一日は二十五六里を走らしむるを得た  
り。而して賃錢も比較的低廉にして一里十錢内外なりしも汽車開通後全く廢  
旅宿料は秋田に近づくに従ひて次第に廉らさざること感あり。

山形縣より杉峠を越れば二里にして上下院内町あり。  
院内銀山は國道より西に一里八町日本有名の銀山なれど近來は衰頽せり。  
横堀町は人口二千國道の路傍小野村に小傍小町の古蹟あり稱して小町出生の  
處といふ。  
湯澤町は人口八千二百を有し此附近風指の都會なり。地に郡役所裁判所あり。  
養一里杉定村に養老二年の近傍床舞村に岩井堂と稱する一勝地あり。又町を距  
此町より陸中に入る道路二一を手倉越といひ増田田子内半倉を經一は酢川  
越と稱し川連稻庭小安を過ぐ。又此地より宮城縣に入るものは横堀より湯の  
岱を經て鬼首に至るものと黒森峠を越ゆるものと二あり。稱庭村は酢川越  
の道路中にありて往昔は雄勝一郡の主たりし小野寺四郎の居住せしところ今  
猶ほ其古城址存す。これより急端の聲巨人の嘯ふかごとく湯元村に至れば溪流殆  
川は深く溪谷を穿ちて急端の聲巨人の嘯ふかごとく湯元村に至れば溪流殆  
と懸瀑を爲せる處ありて急端の聲巨人の嘯ふかごとく湯元村に至れば溪流殆  
へしこの奇景この深山幽谷の中に埋没して世に知られざることを。  
本莊街道をたれば四音馬内小色あり。養老七年の創建あり。  
金峰神社は金峰山にあり。養老七年の創建あり。  
湯澤町より岩崎町を経て横手町に至る。此里程四里三十三町餘。中央



に十文字と稱する一驛あり。街衢十字形を爲し交通甚だ盛なり。  
 十文字驛は四つ辻の四角に大なる旅店ありて、往昔の道中記に見るかごとき地  
 なり。これより四すれは、淺舞、大澤を経て、由利郡の海岸の名色木莊町に至る。  
 その里程十三里餘なり。東すれば、郡の名色増田町に至る。町より稻庭、手倉に  
 至る街道は、御物川、平野の東に位し、人口一萬二千、縣下東部の一大都會なり。  
 横手町は、御物川、平野の東に位し、人口一萬二千、縣下東部の一大都會なり。  
 ことに此地は、奥羽中央を縦貫せる脊梁山脈の低所を越えて陸中と羽後と  
 の兩國を連結せるを以て商業地方に稀れなる活氣を呈せり。  
 町は郡役所、區裁判所、中學校あり。  
 古城址あり。其臺地の八幡宮は眺望のすくれたるを以て名あり。  
 横手川に蛇の崎橋と稱する長橋を架せり。  
 正平寺は長祿年間の創立にして、小野寺泰通の持佛たる十一面觀音を安置す。  
 町の西北二里に淺舞町あり。町に縣社八幡宮あり  
 横手町を東し、平和街道を三里、山内村大字大松川の山中に式内神社鹽湯彦神社  
 あり。  
 横手町を國道に沿ひて三里ほど北に進めば、金澤町に、金澤橋の址を存せり。後  
 の三年、清原武衡、宗衡の籠りし地として有名なり。城址にある八幡社は源義家  
 の勸請せしものにして、甚だ當時の遺代に宿めり。

これより猶進めば、六郷町に一里十九町を隔つ。此地は明治廿九年の震  
 災に逢ひて全く破壊せられ、未だ舊觀に復せず、人口を有する六千餘。  
 町に、諏訪明神、大桂寺、永泉寺、飯沼の古城址あり。  
 此地より角館町へ通する街道北に岐る。里程凡そ五里二十町餘なり。  
 國道はこれより西折し、御物川の流に添ふ。この國道の南數町に角間川  
 あり。人口三千八百、大曲町と共に重要な河港の一なり。  
 此町は十文字より淺舞町を經、平鹿、平野を横斷して直ちに大曲町に至るの衝に  
 當り、旅客多し。また上三郡秋田地方に運輸せる貨物の此町より御物川の舟路  
 を利用するもの多し。  
 大曲町は、其規模、横手に及ばずと雖も、富商多きを以て、家屋皆整頓せり。  
 殊に御物川、丸子川の合流せる三角點に當れるを以て、上三郡の百貨皆此處  
 に集り、重要な河港を成す。  
 官衙は郡役所、裁判所、學校に農學校あり。人口七千二百。  
 大川寺は曹洞宗の巨刹なり。  
 角館街道は此町より岐る。里程五里、道路平坦、車を通ず。



角館町は平野の山嶺と相接する處にあり。維新前は秋田侯支藩の置かれたる處なれど、市街寂寥にして、人家皆富めり。古城址あり。されど人民質素にしてよく職業を營むを以て、家々皆富めり。古城址あり。仙岩峠を越えて一日路にして陸中角館より生保内まで五里十八町、生保内より仙岩峠を越えて一日路にして陸中盛岡に達するを得べし。盛岡の部參照而して此地に遊びたる旅客は生保内の山中一里餘の處に田澤湖の一名勝あるを忘るゝ勿れ。或はマアールと稱す。其形略田澤湖は地質學者或はこれを桶状陥落地と稱し、湖水深例にして、實に仙境なり。里人呼んで田子瀉(タツコガタ)といふ。東西二十六町、南北卅三町、周囲三里餘あり。春夏の候山櫻落花風發して頗る美なり。雪の白浪と稱する地は石英の白砂、人目を眩す。湖中浮木神社あり。賽日には賽客頗至す。

更に大曲町より國道を進めば花館町より。御物川に架したる玉川橋を渡り、神宮寺町の中央に入幡神社あり(を)經て刈和野に至れば御物川の平原は漸く盡きて、小丘陵の影漸く多し。(途中に高寺山觀音、白糸瀑、唐松神社等あり。荒川鑛山は境村より三里かくてこの丘陵の中に和田村あり。これを過れば丘陵次第に開け、鹿島臺の高地より、一路直ちに西を指し、遠く日本

海の怒濤の聲を聞く。秋田市は最早一指願の間にあり。秋田市は兩羽第一の都會にして、東西二十町、南北二十八町、人口二萬八千餘を有せり。御物川其北を流れ、それに合する太平川、旭川の間に一小丘を爲せる秋田城址あり。而して市街はこの周囲の麓にありと稱すべく、長野町根小屋町龜の町等の高地より一步は一步より低く、赤沼長沼桶下に至りて漸次卑濕地となり了る。而して市街は旭川の東西にありて、内町外町の目を分ち、内町には官衙兵營學校士族町等相連り、外町には百貨を擲けるの肆塵陸續として相鱗次す。官衙には縣廳を始めとして、歩兵第十六旅團本部歩兵第十七聯隊地方裁判所區裁判所憲兵屯所監獄署稅務署大林區署等あり。學校には中學校教師範學校高等女學校等あり。また圖書館物産陳列所等の設あり。工業學校もまた近き將來に於いて創設せらるべしと云ふ。市中最も見るべきものは、舊城墟をそのまゝ開きたる千歳公園なるべ







秋田市の東北諸都會の中最も整正にして且つ繁華なり。仙臺の如き青森の如き福島の如き一種厭ふべき俗氣ありて久しく居るべき心地せざれど此地と弘前市の如きは五六日滞留して見たしと思ふ程なり。蓋し人氣好きが爲めなるべし。

秋田市の東北に距る五里に、太平山より。頂上に太平山神社あり。此の附近の靈山として登攀者多し。

土崎港は秋田市を北に距る二里、馬車鐵道の便によるも直ちに遶すべし。人口八千餘、此地は雄勝、平鹿、川邊、南秋田、仙北の五郡より輸出する米穀の集散する所なるを以て、船舶の出入夥しく、商業の盛大なる縣下第一の稱あり。御物川の河口は泥沙堆積し、水淺くして大船を容るゝに足らず。故に、巨船は河口約一里の沖に碇泊し、解を假りて、以て纜かに貨物を運搬す。

(九) 象潟と雄鹿半島

羽後の海岸に二つの勝地あり。一を象潟とし他を雄鹿半島と爲す。象潟は芭蕉翁の奥の細道と松島と共にたゞへられたるほどの名勝なりしも、

震災の爲め海水減退し、今は田疇となり了りぬ。されど、此海岸頗る風景に富みて、旅客の思を惹くこと一方ならず。雄鹿は天下の名勝地は僻陬にありて、多く人の説くものなけれど、到底松島などの及ぶべきものに非ざるは、一たび遊びたるもの皆なこれを言ふ。

今秋田市を發足點として、この二勝を紹介せん。

象潟は由利郡にありて、鳥海山の北麓に當れり。山形縣酒田より吹浦を經て至れば、便にして近し。(酒田附近參照)

秋田市より趣くには御物川を渡り、新屋、長濱を経て南に向ひ、石田阪に至りて始めて渺茫たる大海に接す。道川あたりの海岸は風景ことに美にして、後に雄鹿半島を望み、前に鳥海山の翠微を仰ぎ、道路坦として海岸を走り、快可ふへからざるものあり。ことに海岸には疎松亂立して宛然東海道海岸の海岸に酷肖す。松ヶ崎附近に、ニヶ所ほと特につぐれて美しき處ありしを配臆す。

本莊町は此海岸の名邑にして、由利郡の中心なり。(秋田市より十里二十五町)町に入らんとする子吉川橋上より鳥海山を望む、風光絶佳なり。

本庄町より道路漸く悪しく、平澤、金浦等の海岸は砂路にして、車も渉々しからず。



本庄より象潟まで里數にして七里ばかりなれど、半日は何うしてもかゝる。平澤より金浦に至る間風景よし。

象潟は松島と名を齊うしたる奥羽の名勝なれども、今は震災に逢ひて普通の田畝となり了りぬ。されど、鳥海山の風景は實に佳にして思はず人をして快哉を叫ばしむるものあり。殊に昔の名勝の鳥嶼の田圃中に依然として其名を存したるなど、當年の風景を思ひ出さしむ。

街道より一二町、風情ある松林の奥に、彌満寺あり。寺僧案内して昔を語る。地變のありしは文久元年六月四日。又、芭蕉が「象潟の雨や四施のねむの花」と吟せし古碑其の寺院に残れり。

彌満寺より一橋を渡り、五六町にして象潟町あり。純然たる漁村にして見るに足るものなけれど、近來海水浴など出來たりと聞く。旅店秋田屋。

これより有耶無耶の關の古蹟を見、川袋小砂川(橋南溪の東遊記に、この附近にて狼の出でしことあるを記せり)等の諸邑を経て、三里餘にして山形將の國境に至る。

象潟より吹浦まで四里二十一町、吹浦より酒田まで五里餘。

男鹿半島は羽後第一の勝地なり。秋田市よりこれに赴かんと欲せば、奥羽西線の汽車に乗じ、追分驛に至りて下車。

追分は風情なる松原の中において、即ち男鹿半島と兩羽街道との分岐点なり。途そを覆の岐村といふ。晴日ならばこの先の驛大久保より下車するもよし。途中に砂山あれを、追分より至るより近し。

追分より八龍橋(八郎潟の一處切れて海と接する所にしてこの橋の長さ二百八十間まで五里九町なり。其間に典農と稱する一村あり。

八龍橋を渡れば船越村あり。漁村にしてや、繁華なるものなり。路これより二つに岐る。一は八郎潟の四岸に沿ひて能代に達し、一に日本海に沿ひて、所謂男鹿半島を一周す。男鹿の勝を探らんとするもの後者に由るべし。

船越より船木へ一里、其地に古城址あり。

船木より船川へ一里二十八町。

船川港は東北風指の良港、根の崎の一角長く日本海の怒濤を拒き、海水深くして巨船を泊せしむるに足る。近來西線を此地に延長し、港を築きて、以て東地第一の交通地となさんとするの議論あり。根の崎に燈臺あり。この船川に風景よき旅館ありしと記臆す。







道あり。大峰道と稱し、甚だ峻なり。北浦村に日枝神社、相川村に古城址なり。これより全く海を離れて丘陵の間を進め、龍川村に至る。これより寒風山の頂上まで十五町。寒風山は半島中第一の高山なり。本山眞山の二山が日本海の怒濤を見るに適したると共に、此山が八郎瀨を一眸に收むるの勝あるは特記すべし。これにて半島は一周し終る。この半島をめぐるとは、少くとも二泊或は三泊をなさざるべからず。旅のや、宿するに足るものは、船川と門前と湯本とにあるのみ。されど東北地方に遊びたる人は、いかなる犠牲を敢てしても、この半島に遊ぶべし。この海岸の風景は、蓋し日本稀に見るものと稱するも、敢て過言にあらざるべく、松島など到底その脚下に及ぶべからず。只通路險峻、車を通せず、都に住む人の客易に至り、觀る能はざるを惜むのみ。

(十) 羽後の北部と弘前附近

能代—能代川沿岸—大館—鹿角郡附近—小坂嶺山—十和田湖—矢立峠—弘前市—岩木山—十三瀨

秋田市より汽車は北に向ひ、大久保驛より八郎瀨の岸に沿ひ、森岳、楡山等の諸驛を経て能代町に至る。

八郎瀨の沿岸、風光絶佳なり。眞坂村なる三倉ヶ鼻は一に南面岡と稱し、明治十四年、車駕東巡の時、至尊か風籟を聞いて、この風景を賞したまひしところ、其一角に川山、廻江の撰べる碑立てり。風光の美質に、状すべからざるなり。

能代町は能代川の河口に位する名邑にして、人口一萬一千を有す。能代停車場は町を隔る一里半の處にあり。(車賃二十五錢以下)道路坦々たり。此地は酒田、土崎、新瀉等と共に往昔は日本海漕運の要港なりしも、今は河口淺くして大船を入る、能はざると、冬期は全く航路杜絶するとを以て、昔のごとき繁華を保つ能はず。此地には有名なる能代挽材會社あり。秋田杉の大板を産す。其工場の設備は甚だ至れり。又漆器、能代春慶あり。其價廉ならず、れども、頗る雅致に富めり。般若山の眺望は甚だ佳なり。



て、國道はこれを東に折れて能代川の灌漑せる平野の間を通じ石切に至り  
 橋なり。川を隔て、二ツ井停車場あり。是れ奥羽西線中第一の鐵  
 此附近風景佳なるを以て稱せらる。この附近の風景を見るに尤も適せり。加護山、小繁附  
 七座山神社は縣社にして、この附近の風景を見るに尤も適せり。加護山、小繁附  
 近、米代川の風曲して流るゝさま、一種言ふべからざる味あり。里程九里餘。  
 大館町は人口は七千を有する一邑なり。停車場よりは二十町餘を隔つ。鹿角  
 地方はこれより北向して矢立峠に繁華の區なり。蓋し附近に鑛山多き爲なり。汽  
 車はこれより北向して矢立峠に繁華の區なり。蓋し附近に鑛山多き爲なり。汽  
 鹿角地方は陸中國に屬し秋田縣の管下たり。此地全く一區劃を爲し、地  
 圖にて見れば全く他と交渉せざる山中の一平地の如く見ゆれど、此中に小  
 阪尾去澤の如き本邦屈指の大鑛山を有するを以て、其繁華附近に冠たり。  
 其の中央に毛馬内町あり。

小阪は全く鑛山の爲めになり立ちたる市街を言ふべし。其鑛山の規模頗る大  
 にして、電氣燈の設あり。工場は規模大にして斬新の機械多く、熔鑛爐のこと  
 きは極めて巨大にして、自から誇りて世界無比と稱す。旋風器又新式なり。  
 花輪町は毛馬内町を去る二里、人口七千あり。  
 尾去澤の鑛山は湯瀧温泉、大湯温泉あり。  
 郡中湖は湯瀧温泉、大湯温泉あり。  
 十和田湖は本縣の南方秋田縣と相接せる深山の中にありて、其距離二里餘と稱  
 す。四面悉く峻嶒たる高山を以てこれを圖み休屋宇椽部十濤田等の村落あり。  
 西、南、北、東、四面悉く峻嶒たる高山を以てこれを圖み休屋宇椽部十濤田等の村落あり。  
 石門湖の周囲奇狀なる富み、惠比壽島、甲島、鏡島、種島、蓬萊島等あり。又た、御門  
 社は門を爲す。巨大なる長方形の石、二個併立して、頭部を水面に顯はし、宛然た  
 なり。甚だ小にして、附近には古杉の樹も小暗く、叢生し、日光約二町餘を隔つた  
 岸に遠く、錢を所り、鐵梯を傳ひて、數十俣の菫火口壁を下り、蓄火口たる中湖の沿  
 もの湖に二十餘の錢を得ると稱す。古來此處より賽銭を湖中に投げ、今日これを探る  
 はこの湖に魚介なきを憂ひて、辛其湖の漸く魚類の繁殖を促す。其は  
 汽車は、大館町より矢立峠(有名なる國有林のあるところにして、杉は此地の名



産なり)に向ひ、白澤陣場二驛を經れば地は既に青森縣なり。  
 陣場驛より十四五町、大湯澤温泉あり。  
 碓ヶ關町(地に温泉あり平川に臨む)を過ぐれば、山嶺次第に開け、大鰐驛に至る。  
 大鰐温泉は平川の沿岸大鰐町にあり。町は平川を隔て、蔵館町と相對し、人口併せて二千餘を有せり。頗る山水の趣に富み、温泉場亦甚だ完備せり。泉質は鹽類泉にして、河原湯熱の湯、飛の湯、大泉等の數湯に分つ。對岸蔵館にも亦同質の温泉あり。旅亭は大鰐にて加賀助、蔵館にて山二をよしとす。對岸蔵館にも亦同質の温泉あり。箱根伊香保たり。此温泉は弘前附近より來り浴するもの多し。  
 大鰐を去ること二里にして、津輕平野は前に開け、岩木山の形正しき姿と弘前市の瓦葺粉壁とを前に見ゆる。  
 弘前市の東西三十四町、南北一里五町、戸數六千五百、人口三万四千七百餘を有し、市の數七十一。津輕氏歴代の城にして、慶長年間中興の祖津輕信牧此地に城を築きてより、其巍然たる白堊は長く此平野の間に君臨せり。

明治四年廢藩置縣の後、頗る衰頹を來し、士族は各所に散落し、工商は多く業を失ひ、縣廳も青森市の爲めに占有せられて、一時は殆ど支うべからざる境に沈淪せしむ。明治廿七年、奥羽西線の鐵道開通せられ、續きて第八師團設置せられたる爲め、爾來日に月に盛運は赴き、漸く舊觀を恢復するに至れり。  
 市街の最も繁華なる處は本町及び土手町、松森町にして、本町は國道を一直線に大圓寺の五重塔に通じたる道路を言ふ。土手町、松森町は即ち本町の一角を右に折れたる秋田街道にして、人家櫛比、夏の夜は露肆の燈光燦々として、雜選を極む。第八師團の兵營は新寺町に於ける歩兵第三十一聯隊をその重なるものとし、其他騎兵第八聯隊、野戰砲兵第八聯隊、工兵第八聯隊、重兵第八大隊等は皆市の南部にあり。而して其首腦たる第八師團司令部は清水村字富田にあり。  
 弘前舊城址は屹然として市の中央に聳え、松樹鬱蒼たる間より、環殘の白堊の壁









此の地産物多く、殊に津輕塗漆器の如きは、一種堅實なる塗法の中に無限の雅致を帯びて、都人の珍重する所なり。又、苹果を産出すると甚だ多し。

其の征森町に、寛永元年今の津輕信牧の夫人の勸請したる者にして、初めは城内にありしを、寛永元年今の津輕信牧の夫人の勸請したる者にして、初めは城内

年八問餘の山門にして、南朝以來の五色を帯べり。寺内に於て、大鐘は嘉元四年

長勝寺は西茂森町に、隆し、津輕地方曹洞宗の總本山にして、長勝の名は爲信の曾

行能は涼を取、此の地より、是の盛なるは、市中この境内を以て、第一と爲す。

七間餘の何れ、南木町通の市に於て、寛文七年に建設したるもの、高き十

大回寺の五塔、南木町通の市に於て、寛文七年に建設したるもの、高き十

趣み、その遊覧者をして、岩木川一帯の銀蛇のごとき流と、遠く四方岩木山を望し

以て、乞ひ、種々、歴史、博覧、天守閣、は、史前時代以後、古器、武士等、城の地を、陸

軍省の五門、公園、爲し、天守閣、は、史前時代以後、古器、武士等、城の地を、陸

明治四年、陸軍省の用地となり、八樓十二門を具し、日本七名城の一なりしを、

石壁の高さ、五丈餘、三重、壘にして、八樓十二門を具し、日本七名城の一なりしを、







河原木造等の名邑あり。十三瀉地方津輕平野の遙かに北海に瀕せる地方にして其中央に五所

し。且其柱礎には皆名工の彫刻を以てし、甚だ壯麗を極めたり。木造町より十三瀉に至る途中に、龜ヶ岡あり。石器時代の遺物多くこの土中より出づるを以て有名なり。これより十三瀉に至る路は、海岸にして、防風松林これに並ひ風景よし。十三瀉は周囲八里の瀉湖にして、津輕平野の大小河川總て十三この瀉に注ぐを以て有名あり。湖の南岸に十三と稱する一邑あり。羽後の八瀉瀉に次いで風景よし。大月湖の奇景、鱒ヶ澤より海岸を西に四里創立せる奇岩二、共に第三紀なる斑緑色の角礫質凝灰岩より成る。怒濤これに激し、風浪凡ならず。殊に千疊敷の奇人は人をして佇立するに忍ばざらしむるものあり。これより西南六里深浦町あり。

(十一) 岩越鐵道沿線

猪苗代湖—若松市—柳津の虚空蔵—越後街道、

岩越鐵道は日本鐵道郡山驛より會津地方に至り、將來は越後の新瀉に出んとするものにして、今は若松市を一時の終端驛と爲せり。

熱海温泉は熱海停車場より一二町、泉質は炭酸泉なり。浴舎は松木屋をよしとす。

猪苗代湖は安積耶麻北會津の三郡に跨り、東西三里餘、南北二里餘、周圍十三里餘に及ぶ。湖中一島あり。翁島と稱す。其の西北より湖水溢れて日橋川となる。その水の若松街道を貫く所、十六橋を架せり。而して此地戸ノ口より山瀉舟津へ舟楫の便あり。

猪苗代町は人口三千六百あり。町の北磐保村見福山に土津神社あり。猪苗代川を見るによし。又四方一里、陸上原に三忠の碑あり。

盤梯山は耶麻郡の東方にあり。標高六千四百八十一尺、明治二十一年の噴火は猶人の記憶に存する處なり。モウレ一記して曰く「此山の大きな破壊せる所を見んと欲すれば、舊本街道に別れ、人力車にて行くこと一里、乗馬なれば猶ほ前進し得、夫れより徒歩右折し、大盤梯の裾野を繞る、裾野は長くして多く草を生ぜり、高樹の鬱茂せる所に至り、登路急峻となり、三時間半



は形勝の地たりしに相違なし。往時は芦名蒲生上杉加藤の諸氏互にこれを領し徳川氏に及びては保科氏の封土となり久しく東北の雄藩たり。維新の亂官軍に抗して天下の大兵を此一城の下に集め大に會津武士の氣風を揚げたり。城址は市の南端にありて湯川に臨み轉た遊客をして當年を追想せしむるものあり。市の廣袤東西卅二町南北二十町戸數五千三百人口三萬九百餘を有せり。

停車場は市の北端にあり。直ちに南大町通に至る。大町は市中の最も繁華たる處なり。大町の右を上町といひ左を下町といふ。榮町は大町の南にありて、郡役所裁判所等の官衙皆なこの地にあり。大町を左に折れば坂下街道あり。これに添うところを七日町といひ往來頻繁なり。

市は陸羽に於ける風指の工業地にして漆器は殊に其名あるなり。又本郷焼と稱する陶器あり。共に東北地方に於ける著名なるものにして産額多し。

飯盛山は東の東端淵澤村にあり。戊辰の役白虎隊の十九士が君難に殉じたる地石碑堂に安置せらる。山脈に石碑あり。又十九士の木像盤銅養神社は停車場の東方約五町にありて縣社なり。

程に於て西の山温泉なる一山あり。山麓に來る前爆發の慘澹たる状か現出し人目を迷はしむ。此所に山中温泉の小屋あり。爆發當時其東室にありし者は死し西室(茶の間)にありし者は死せり。此山噴出せる泥は如く人を感動せしむ。山の進蝕せる結果に火孔壁に猶ほ蒸氣を噴出せり。此山噴出せる泥は如く人を感動せしむ。山の進蝕せる結果に火孔壁に動を成せる風景は大變の如く人を感動せしむ。山の進蝕せる結果に火孔壁に川の廻行するに全一日を要す。徑路は荒廢せる川上村を過ぎ谷を下る。三長瀬の泥を越えて長瀬に埋せられたり。此流下する能はず遂に椹原湖を形成せり。風曲せり。部分に哩乃二哩あり。以上の困難なる歩行を欲せざれば人力車に乘じ、又二十哩なる處に立温泉に下り、二十町にして可とす。此山頂に登らんとすれば、三十五度の角にして岩越鐵道島停車場に至る。可とす。此山頂に登らんとすれば、三十五度の角にして急峻困難なり。他の一面は極めて急激に直下せり。眺望壯麗。越中の連山を望む。以て其一斑を窺ふべし。

其の汽車は猪苗代より翁島大寺廣田等の諸驛を経て直ちに會津盆地に入り。若松市は東に山嶺、西に清流、西北は遠く開けて、平野十數里往昔にありて



道は遠からずして越後に至るべし。
これより阿賀川に沿ひて下れば十二三里にして新潟縣に入る。岩越鐵

(十二) 陸前濱街道

勿來關—湯本—平町—久の濱—波立藥師—相馬地方—松川浦

日本鐵道の海岸線は往昔の陸前濱街道に沿うて磐城を縦貫し、
直ちに陸前國に入り岩切町に至りて陸羽本街道線と相會す。この沿線多

少の記しるべきものなきにあらず。
勿來關—常陸平海より陸道を出て、先づ訪ふべきはこの古關址なるべし。源



萬餘を有せり。商業や、活潑に、市街整正なり。この町より磐城の山地を横断して、柳倉町に至る路あり。市中に所子鉄倉神社と稱する式内社あり。旅店は住吉屋。町の西三里赤井嶽あり。山の中腹に常福寺と稱する眞言宗の寺あり。夏秋の候、これに參籠すれば、海中に龍燈見ゆとて來り宿するもの多し。四倉町は半商半漁の村なり。久の濱町は殆ど漁村にして、海岸に近く、風景他に超えたり。波立の濱は、この濱の波打際において、大同年間創建の古刹と稱せらる。海岸に奇岩多し。枌木嶽泉は廣野驛より近し。又この附近に檜葉入幡、岩澤觀音等あり。請戸港は往時相馬の名港たりしもの、磐城産米穀を皆此處より輸出せしなり。今、年稍衰へたれど、猶この地方にては、すくれたる都邑なり。風光よし。海水浴に、近年より開かる。旅亭は有明櫻朝日屋、硝子屋。宿料、十錢より六十錢。地に、請戸明神と稱せられたる古祠あり。里程二十里に近からんといふ。浪江町より福島市に通ずる山路あり。小高町以北を相馬地方といふ。有名なる相馬の野馬追祭の社、太田神社は太田停車場より十五町餘。原ノ町は一に弓形の宿といふ。大原街道これより岐る。羽二重及び筵を産す。

又馬市あり。人口四千餘。相馬侯の治所たりし中村町は原の町より五里、汽車なれば四十餘にして至るべし。其繁華平町と伯仲し、人口七千を有せり。名産に、陶器相馬燗あり。其特色は地質の堅牢なること、必ず馬の繪を描けるにあり。相馬神社は野馬追祭の最後の社にありて、中に中村神社と相馬神社とあり。相馬神社は野馬追祭の最後の社にありて、中に中村神社と相馬神社とあり。原釜海水浴、此地は濱街道沿岸中、ことに風景のすぐれたるを以て名あり。中村驛より一里、車賃十八錢を出せば、達す。晴天には、其海岸より、陸前の金華山を雲間に、見るを得べしと云ふ。旅館には、東洋館、望海樓、原釜ホテル、丸仙、相馬館等あり。宿料六十錢以上、一圓以下。松川浦は宇多川の河口開けて、宛然一瀉湖を爲せるか、こときものにして、其風光の美にて、到底松島の大觀に比すべくもあらず。只鷺の尾岬の一端、夕顔觀音の境内は、眼下にその大觀を集めて、人をして快哉を叫ばしむること、奇なきにしもあらず。人はこれを稱して、松島、雄鹿と共に奥羽地方の三大勝とすれど、如何にや。鳥の海海水浴は、亘理停車場より近し。

要するに、此濱街道には、さして見るべきものなし。羽後の海岸三陸の海



岸に比して風景の上にて遜色あるは素より言ふを待たず。且風俗人情も未だ開化の境に達せざる處多く旅店の設備も多く整ひたりと謂ふべからず。されば宿料などの低廉なるは此地の特色にして、いかなる海水浴場にてても一圓以上のところ少し。唯相馬地方は風俗また他に異りて面白きこと多し。野馬追祭りごときは蓋し其の尤もすぐれたるものなるべし。旅客もしこれを觀んと欲せば七月初の三日に於て同地方に赴くべし。一

第貳編 中部

第一章 東海道

(一) 横濱まで

品川町—大森町—池上本門寺—川崎大師—横濱市—横濱

旅客の便を料りて東海道を一直線に官線鐵路を中心として記し去らんとす。蓋し東海道は本邦の東部と西部とを連絡するに於て最も緊要なる道路にして、東京と西京大阪は實にこの一線の下に繋がれたるものと稱して可也。

汽笛一聲西に向へば品海の水曉雲の影を映して白帆一二夢をみるがごとく此間を行く。

最初の停車場は品川驛。この停車場前かかの電車鐵道會社の電車は通へり。前に高き丘陵は御殿山なり。今は昔の如くならされとも春は花多し。停車場



川崎町は東海道中流電車の名所なり。矢口村は六郷川を渡りて、堀之内に其停車場あり。川崎町は東海道中流電車の名所なり。矢口村は六郷川を渡りて、堀之内に其停車場あり。川崎町は東海道中流電車の名所なり。矢口村は六郷川を渡りて、堀之内に其停車場あり。

師に至る。此の大師の像は海中より獲たるもの、よしにて、堂宇甚だ宏壯なり。近來其南隅を公園と爲し、泉池あり、梅林あり、一遊に値ひす。門前には飲食店雜貨店軒を並ぶ。途中の堤上に、櫻花多し。小向井梅林は停車場より西北二十町。かくて東京灣の東側に發達せる海岸平地を駛ること八里、相摸の東北部の小丘陵漸く右方に顯はれ、富士山の秀容は群山の中に擡んで立てるを見。鶴見の小驛を經れば、東京灣は眼下に驚くべき活躍を呈し、帆檣煤烟汽笛。見よ、横濱港は神奈川町を其門戸と爲して、其前に横はる。







丁目より。慶應二年には太田屋新田沼地埋立に着手し、米屋町の地を填め、本町一  
 明治に至りてより百般の事業盛に起り、十五年遊廓の經營成り、二十年水道工事  
 成就し、三十四年戸太町神奈川町、本郷町、根岸町、中村、新田を合して市域を擴張し、  
 同十二月水道鐵管工事落成せり。今日街頭を行くもの五六十年前には、一面の  
 海岸の漁村たりしとは誰か想像せん。

横濱市中の巡覽の道順を簡單に記さん。停車場を出て右を仰げば一帯  
 の丘陵あり。これ野毛山なり。丘上に太神宮あり。旅客は先づこれに  
 上りて、一眸の下に市の光景を指點すべし。南山手の丘陵とこの今立てる丘  
 陵との間の低地は即ち市の百萬瓦葺にして弓弦のごとき港は無数の帆橋  
 を泊せしめ、港門に入り来る船舶の光景眞に畫くが如し。而して其港頭に  
 長く突出したるは、遠く千里の各外國の港の埠頭と相通せる埠頭なり。此  
 の野毛山の境内は、春は花秋は紅葉に宜し。少しく下れば野毛の不動堂あり。

り。此附近雜貨店、飲食店多し。見晴亭と稱する汁粉屋あり。これより野  
 毛の切通を下りて都橋に出て花咲町より辨天橋を渡れば市中の中心なる  
 本町通に出づ。宏街宏屋相連る。これと並行して南仲通、辨天通の二路南  
 北を指す。本町の十字街頭には行政機關の重なるもの皆あり。先づ市役  
 所を過ぎ四ツ辻を右に出れば、神奈川縣廳の大なる建物あり。各國領事館  
 の建物も亦宏壯なり。これを突當れば、税關の面白き建築あり。其中央を  
 五層樓と爲す。水道局は税關と路を隔て、斜に相對す。其背後の一角に、  
 電話交換局あり。海岸に近く、日本郵船會社の倉庫と東洋汽船會社とあり。  
 辨天橋より來りてこの四ツ辻を右に行けば、横濱公園あり。公園としては  
 甚はだ物足らぬ感あれど、ロンテニス、ベースボールなど盛んに其地に行は  
 れ、西洋人の夫妻相携へて樂しげに逍遙せるなど、外國にても行きたる如き  
 心地す。税關より右すれば海岸に出づべし。先づ眼に入るは大なる埠頭



に巨船の横附にせられたる光景ならん。埠頭の長さ約六町其埠頭に巍然として聳えたる洋館は税關改所なり。これより右に進めば海岸通にして、道の平坦として磚石を敷きたるがごとし。晴波春日に映ずるの日は宛然外國の埠頭に上陸したるごとし思あり。路の左に測候所あり。丸き赤き球形の氣象球あり。又此海岸にはグラランドホテル、メトロポールホテル等の巨館相接しバルコンに洋人の三々相集りて海などを見たる、一幅の畫のごとき心地せらる。舊居留地はその海岸通を脊中合せを爲し、巨館宏宅多し。海通より堀川を渡り、谷戸阪を上れば南山手に至る。地丘陵を爲せるを以て眺望よし。且洋人の別墅住宅等相連り樹影多く宛然外國の都會の近郊に出でたるごとし觀なり。谷戸阪の上に公會堂あり。それより左に行けば本牧地方に出づべし。右に行くこと一二町下に市街を見下したる一角に外國人共同墓地あり。また直行すればフェルス女學校、山手公園等あり。

り。代官阪を下れば元町に有名なる古刹増徳院あり。前田橋より南京町に至る。これより前記の公園まで二三町なり。横濱公園より吉田橋を渡れば伊勢佐木町に達す。賑かなる町なり。二丁目には羽衣神社あり。交通陸運には官設線其の主なるものにして横濱驛の他に平沼驛あり。京阪地方に赴くものはこれより乗車す。又京濱電車あり。水運は左の如し。

- ▲ 日本郵船會社 内國航路
- 神戸横濱小樽間(東廻) 神戸・横濱・秋の濱・函館・小樽 三日毎に小樽港に向けて
- 横濱港を發す
- 横濱神戶小樽間(西廻) 横濱・神戶・尾ノ道・下關・境・敦賀・七尾・伏木・佐渡・渡津港・舟川・函館
- 小笠原島航路 横濱・八丈島・青ヶ島・鳥島・父島・母島・南硫黄島・中硫黄島 毎月一回横濱を發す
- 大阪商船會社 横濱・神戶・宇品・門司・長崎・壱岐・澎湖島・安午・打狗 毎月二回其他横濱・打狗間







▲ 奥太利ロイド汽船會社	▲ 航路 トリエスト・ブイユメ・ポルトセイド・スエス・アデン・カラチ・ボンベイ・コロ	▲ 南洋汽船會社	▲ 航路 グラスゴウ・リバプール・アムステルダム・ロンドン・ポルトセイド・スエス・	▲ 航路 コロンボ・ペナン・シンガポール・香港・福州・上海・門司・長崎・神戸・横濱 二週一	次に、本港より内外國諸港への海路程は左の如し。	神戶	長崎	半田	香島	サイゴン	マニラ	スマタラ	コンスタンチノープル	ウラジオストク	マニラ
三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七
馬關及門司	函日市	四日市	三、七九五	三、六二〇	三、八九八	四、八九八	五、四三七	九、三三四	九、六一四	九、七三九	九、三九八	九、三九八	九、三九八	九、三九八	九、三九八
萩	新	基	アデ	メル	シ	ア	シ	ア	シ	ア	シ	ア	シ	ア	シ
二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七

上 海 一、〇九〇  
 ホートセイド 八、一一一  
 アレキサンドリア 八、五二五  
 アンヘルス 一一、〇二五  
 リバプール 一一、七〇六

旅店は海老屋、太田屋、廣島屋、松井屋、蓬萊屋、信誠館、鹿島屋、福井屋以下數十、料理店には真砂町の富貴樓、青木町の茶々其他無数。宿料一圓より一圓五十錢内外。

遊廓は眞金町と永樂町、劇場は羽衣座、喜樂座、眼座、雲井座、相生座等あり。

横濱より東部の地は、小丘陵相連り、本牧附近殊に風景に富み、里人はこれを屏風浦を言ひ、外人はこれをミスシツピーヘイと稱せり。白色の絶壁高く海波に臨み、松影の間處々に白帆を見、風致言ふべからざるものあり。

根岸の競馬場は此附近にあり。風景よし。又、この附近に海水浴場あり。本牧十二天の社は其絶壁の一角にあり。

杉田梅林は横濱停車場より三里、屏風浦に沿うて行けば二時間にして達す。根岸より乗合船もあり。梅林は海に瀕し、東京附近梅花の名所として



は先第一なり。其上の丘陵の眺望はことにすぐれたり。杉田より丘陵の相蟠れる間を行けば二里餘にして有名なる金澤八景の地に達すべし。

丘陵の漸く開けんとする路傍に能見堂あり。金澤八景を眺望する第一の勝地なり。金澤八景は昔は名高き處にして其風景も此海岸に冠たりしならず。且交通の便に乏しき爲め遊客比較的少し。能見堂は巨勢金岡の擲筆せしところと稱し、往昔は大なる堂宇ありしも今は一小堂を留めたるのみ。祠畔に擲筆の松あり。此處より見れば海上に夏島、猿島、鳥帽子島等の小島星散羅列し、流石に風致に富めり。八景の目は洲崎晴嵐、瀬戸秋月、小泉夜雨、乙船、歸帆、稱名寺、晚鐘、平瀨、落雁、野島、夕照、内川、暮雪なり。山を下れば瀬戸に至る。海水深く入りて、茶樓これに望み、風景よし。西に一町瀬戸明神あり。

九覽亭は八景の外に能見堂をも併せ見るを以て此名あり。此亭より野島の夕照を見るに最も適せり。野島より西すれば此地方に有名なる泥龜新田の牡丹園あり。稱名寺は鎌倉時代の古刹にして中に北條實時の建設せる金澤文庫の遺址あり。

この地より鎌倉雪の下まで二里餘。横須賀へ三里、浦郷を経て横須賀に至る乗合舟あり。途中、風景佳なり。

(三) 鎌倉江の島横須賀附近

程ヶ谷町—大船—鎌倉—逗子—横須賀—三浦半島の略説  
—江の島—鵜沼

汽車は神奈川より横濱に寄らずに平沼驛を過ぎて直ちに湘南の地に向ふ。

先づ程ヶ谷町あり、五十三次の一驛たり。今人口五千を有す。















時小なる祠堂をつくり、中に半僧坊なるものを祀れり。而してその信仰の盛なるや、毎月十七日には、丘上殆ど賽者を以て埋却せらるゝに至る。丘陵の登路凡そ五町許堂宇の近傍に一箇の茶亭あり。其處より望めば、富士及相模灘の風景悉く一眸の中に集り、頗る壯觀を極む。更に攀縁して奥の院に至れば、横濱方面に於ける小山脈の波濤のことく起伏したる面白き光景は宛然としてこれを掌に指すがごとし。

鎌倉を出て、汽車は其東を劃れる一丘に隧道を穿ち、又鎌倉平地と類を同し、したる小平野に出づ。其中央に逗子の停車場あり。海岸は停車場より西南に開けて前には衣笠山脈の餘派低く連り渡れり。

停車場を下り、御最後川の流に沿ひて、松影白沙の中を行くこと十町、海水浴あり。此地は海水浴場としてこの海岸殊に遠淺を以て有名なり。これを以て夏季は浴客陸榎として來り、旅亭二三、養神亭、日蔭茶屋、柳屋あれども、一の空室なきに至る。砂濱、海に沿ひて弓形を爲し、西には豆相の連山を凌ぎて富嶽の雲表に望むるを見、右には鎌倉江の島の海岸の遠く、朝日の出づるを望み、夕日の没する三浦半島の長汀曲浦また鬚眉の間を掠めて、朝日の出づるを望み、夕日の没するを送り、或は風暴く波高く海面些の帆影を見ざるの壯觀より、或は明月後山の巔に上りて、海上の金波悉く此地に別墅を設くるもの年々多きを極め、美を加へ、松影の參差たこれに以て、貴顯紳士の此地に別墅を設くるもの年々多きを極め、美を加へ、松影の參差た

る中、白沙の濼々たる邊、時に玲瓏たる琴聲を聞き、時に綽灼たる衣影を見る。後最期川を渡りて、三浦半島に通ずる海岸の路を傳へば、

葉山の勝は漸く眼前にあらはれ來りて、森戸浦の絶景は一步ごとにその美を展開す。此地は逗子と相隣れども、逗子より海を見ること大に、最も豆相の山、富嶽の雲烟を望むに適せり。ことに、海上數町のところには、名島の小島嶼立のごとく、點在し、其間を白帆の去來する、眞に一輻の畫圖のごとし。其南背松遠く若を拖きて、一端長く海中に突出す。これを長者ヶ崎と呼び、海水浴場長者園あり。また、此の地に東宮御用邸あり。皇太子同妃兩殿下は年々此邸に御來遊あり。

此附近に六代御前墓、櫻山村字柳作山、三浦道春墓、逗子村延命寺等あり。又小坪村に披露山古戰場あり。

逗子より横須賀に至る間、汽車は數個の隧道を穿たざるべからず。以てこの三浦郡の小山矮嶺に富みたるを推知すべし。

横須賀停車場に達せざる前、旅客は已に隧道の絶間々々より、鏡の如く美しく展げられたる海灣の鬚髯を認むることを得べし。而して停車場は實にこの海灣の名残なく、其所に開かれたる處にあり。前には軍艦水雷艇を



波に一種名状すべからざる反響を傳へたり。今横須賀港の概略を記せば、

横須賀港 横濱港を距る南の方大凡十二哩、本牧岬と觀音崎との中央にありて、勝ヶ岬と箱崎とは更にこの港の南端を圍めり。港口は北に面し、この徑幾かに四町餘、内に入りて漸く廣く、南に延びて更に東に折れ、延長大凡十八町、海面の廣さ凡て七百一十萬四千餘坪に及ぶ。連山この周圍を繞るが故に、いかなる暴風怒濤の日といへども、船舶は安じて其中に碇泊する事を得べく、加ふるに、岬の出入甚だ多く、岸頭又處々に絶壁を削立したれば、風光の明媚なる宛として、畫圖のごとく、眞に天然の良港なり。維新前までは僅かに現今の元町と稱すると、この間に三十餘戸の人家を有せし一漁村たるにとゞまりしが、地勢の軍港に適せると、交通碇泊に便なるとによりて、實に長足の進歩を爲し、今は人口二萬四千七百餘を有する一都會と爲れり。市街は數區劃を爲し、元町、旭日町、尤も繁華なり。造船所 是南西に面せる海灣の平地にありて、表門は東に面し、裏門は南に面せり。工場は重なるものは、船渠、船塢、鐵船製造場、鑄物場、船具製造場にして、其他倉庫、石炭庫、水溜等あり。船渠は大小三箇あり。一は長六十四間、深、四間、口徑十三間、二は長七十七間、深、五間、口徑十五間、三は長、四十四間、深、二間、口徑八間を有し、共に本邦有数の船渠なり。鎮守府 正門は稻岡町通と相對し、數箇の洋館より成れり。

其他、海軍機關學校、海軍機關術練習所、海兵團、海軍病院等あり。陸軍に屬するものは、要塞砲兵の屯營を主とし、捕ヶ浦、泊ヶ浦、猿島等に無数の砲臺あり。大瀧町には、東京横濱に通ずる汽船の發着所あり。猶進めば、港中第一の勝地とも稱すべき、來の濱に達す。こは若松町の東端に突出せる一小岬にして、上に龍木寺と稱する日蓮宗の寺あり。但俗、米ヶ濱の祖師堂と稱し、風景の絶佳なる殆ど人をへんと欲し、猿島の砲臺の朝日夕日に閃耀たる確かにこの附近の一勝地たるに習所を置けり。アンシンの原名はウイリヤム、アダムと稱し、英吉利の人なり。

更なる停車場に返りて、吉倉の渡船場に至れば、横須賀と長浦とは堀切を以てこれを通じ、絶えず小蒸汽船の往來するを見る。

長浦海 此地は舊に幕府が船廠を設置せんとしたる處にして、灣口東北に向ひ、南に延びて、更に西に折れ、延長大畧横須賀灣に同じ。只灣内狭くして、海面の幅員横須賀灣より小に、水深又處々に淺所あるを以て、遂に横須賀をして其名と成さしむるに至りぬ。今其海岸、船越と稱する地に、海軍水雷術練習所、全砲術練習所を置けり。アンシンの原名はウイリヤム、アダムと稱し、英吉利の人なり。



慶長五年、難破して我國に漂流し、浦賀より上陸して、江戸に至りしに、幕府これを  
とて、いめて還さず。アンドン又我邦の風土の溫和なるを慕ひ、遂に歸化して職祿を  
二百五十石を賜ひ、この三浦郡逸見の地を領せり。其墓は横須賀より金澤に至  
る本道十三峠の上、路傍の丘上にあり。これ、渠がこの地の風景の絶勝なるを愛  
し、遺言して此處に葬らしめたるなりといふ。其墓は横須賀の絶勝なるを愛  
衣笠城址に、停車場を距る南一里、衣笠村大字衣笠の山嶺にあり。三浦氏累代  
の居城にして、三浦大介義明に至りて、島山重忠の爲めに亡さる。山甚だ隆から  
ずと雖も、坂路險峻にして、一見、要害の地たるを知るべく、今は老樹鬱鬱たる間に  
僅に城址の跡を存せるのみ。三浦大介の墓は同村大字大矢部満昌寺境内にあ  
り。浦賀町に一字を設け、裡に大介東帯の像を安んじたり。大矢部満昌寺境内にあ  
り。浦賀町に、南に二里を隔つ。其間に大津の海水浴場あり。港灣さながら、護を  
括りたる如く、人家は其兩岸に櫛比せり。人口一萬三千を有せり。幕府時代  
は、唯一の要港にして、外國との交渉は此の地を限りたりしかど、港口の狭少な  
と、風浪の狂惡なるに、外國との交渉は此の地を限りたりしかど、港口の狭少な  
は、後、唯日本船の帆檣の纜かに、その間に立てると見るのみ。愛宕山は西浦賀の  
背後に聳え、風景この地に冠たり。其他、走水神社あり。久里濱にベルリの記念  
碑あり。

浦賀より南に向ひたる一路は直ちに三浦半島の一角三崎港に向ふ。此

間里程五里餘多くは高原にして、松影浪聲風景の眼を樂ましむる處尠な  
らず。

松輪村に海水浴あり。松輪村とは七八町を隔てたる、松輪村の南端を指し、風光  
る、陸崖の上に旅館松輪館あり。前に東京灣口を望み、嶺山の南端を指し、風光  
可なり。只海水深くして、婦女子の浴に適せず。此の地は東京橋船松町よ  
り、東京灣汽船会社の汽船にて、半日に至るべし。この附近、岩石怒濤の奇多し。  
松輪より三崎町まで三里。  
三崎町は三浦半島の極南端に位し、城ヶ島其前に横はる。其間一道の海峡を爲  
し、大風浪の時と雖も、よく風波を避くることを得べし。これが爲め、古來より和  
船の好避難所として有名なり。人口八千七百を有し、住民多く漁業を専らとし、  
其の收穫は汽船にて皆なこれを東京に運搬す。これが爲め、此地を發する汽船  
は、毎夜九時過にして翌朝東京に入るを例とす。一葉海を渡れば、城ヶ島の海峡  
に面して、百餘の人家あり。島の四端に不動緑色の燈臺あり。  
新井城址は小網代にあり。三浦氏の割據せしところなり。其附近に三浦臨海  
實験所あり。帝國大學教員學生をして、寒ら海産動物の研究實験に従事せしむ  
る處とす。此の地は本邦中有數の海産物豊富の地にして、従つて其研究に便宜  
なる實に大なり。現に其研究の結果として世界動物學者に聞えたるもの多く、



歐米學者に珍重せらるゝ海産物中、この相模洋の産にかゝるもの夥なからず。これより半島の西岸をめぐり、葉山村より逗子に至る沿岸の風光美に、殊に富岳天城山を望むの景は、到底他に見ることを得ざるものあり。里程七里餘。

江の島は鎌倉と共に湘南の一名勝たり。其海山の風光甚だすぐれたりと謂ふにあらねど、都に近きを以て、大に人口に膾炙し、一別天地として行い遊ぶもの多し。其本路は官線鐵道の藤澤驛より下車し、其地より片瀬を過ぎて鎌倉に通ずる江の島電車に乗り、直ちに其地に至るをよしとすれど、爰には鎌倉よりの道順によりて記さん。

鎌倉長谷より星の井の前を過ぎ、極樂寺切通を過ぐ。此地は新田義貞が鎌倉を攻めし時苦戦して、其將大館を失ひしところなり。切通を出づれば、電車あり。これに乗ずれば、直ちに海岸に出づ。新田義貞の金刀を海神に捧げしとの稲村ヶ崎長く海中に突出して、風景美なり。これより腰越村に至る一里餘の平沙を七里ヶ流といふ。街道に日蓮が袈裟懸松あり。又、行逢川あり。此の海岸より

の島の青螺浮ぶが如く、宛として一幅の畫圖なり。腰越村に満福寺あり。元暦二年源義經が腰越状を草して、宛を見頼朝に訴へしところなり。片瀬に龍口寺あり。殿堂高く街頭に臨み、寺城廣潤なり。猶行くこと數歩、更に右折して疎々たる松林の間を穿てば、二帯の砂山あり。此れを越ゆれば、江の島は眼前にありて、其大華表は一條の長橋の上に立てり。此間、眺望絶佳なり。

島は周圍凡そ十八町片瀬の海濱を距ること五町許、全島皆岩石より成り、斷崖絶壁四面を圍みて、怒濤の音日夜絶えず。島の北端なる華表を過れば、酒樓旅館高きに從つて、層々相連り、碧瓦粉壁の海波に掩映するまことに繪島の名に負かず。此の附近貝細工を賣るもの軒をつらねたり。

旅店は岩本樓、巖波屋、江戸屋、北村屋、金龜樓等あり。岩本樓、巖波屋は富士を見るに適し、金龜樓は七里ヶ流より鎌倉逗子地方を見るに適す。宿料一圓以上一圓五十錢。

江島神社は邊津中津奥津の三に分ち、邊津は人家の上數十歩のところにあリ。中津より奥津に至る處に一遍上人成就の水あり。山二つの懸崖は



深く眼底に落ちて怒濤狂瀾の相奮闘するさま奇観を極む。奥津の宮を西に下れば南端に兒が淵あり。相傳ふ往昔鎌倉建長寺の僧岩本院の兒白菊も亦た悲嘆に堪へず相尋いて身をこの淵に投ず。故にこの名ありと。一條の細徑それより奇岩立ち怪石聳ゆるの間に通じ遂に龍窟の前に至る。洞口は南に面し瀾さ方一丈餘入口に棧道を架して潮の衣を濕すに備ふ。窟中祀るところ則ち昔の窟辨天にして窟に入ることも大凡四十間にして胎藏谷金剛谷に分れ最奥に大日如來を安置す。島の西端に組板岩あり。扁平にして席の如し。島上の西南端なる茶亭の榻に凭りて望めば富岳及び大島の景實に佳絶なり。

鮑、茶螺等此地の名産なり。暇もまた多し。此島の漁夫遊客の望に應じて水に入りて鮑を取るにあり。此島も近年大に發達し、都人士の別墅松林の中に散在せるに至れり。片瀬

瀬川口に片瀬館と稱する旅館あり。鶴沼海水浴 片瀬以西の砂山を隔て、一里ばかりの處にあり。藤澤停車場より一里許風情多き松林の中にあり。旅館は、東屋、鶴沼館、待潮館、三井樓等あり。宿料比較的低廉にして滞留に適す。

(三) 大船より國府津まで

高津町—茅ヶ崎海水浴—平塚町—大山町—大磯海水浴—國府津—

大船より官線の鐵道は次第に西し藤澤町に至る。

藤澤町は人口七千九百、此附近の一小中心地を爲せり。

町に有名なるは時宗の本山遊行寺あり。停車場の北十二町餘を隔つ。寺、本名を藤澤山淨光寺と稱し、正中二年、侯野五郎景平の創建にかゝり、規模宏壯なり。住職多くは宗祖遊行上人の例に倣ひて、各國を歴遊するを例と爲せるを以て、人皆な藤澤の遊行寺と稱す。後山に富士見亭あり。又其東に小栗堂あり。寺寶に小栗滿重の愛馬鬼鹿毛の輿、照手姫の古蹟等あれども信ずるに足らず。茅ヶ崎の地は、近年まで唯一箇の漁村なりしも、風光の明媚なると、海水浴



場なるに適するを以て停車場を置くに至れり。

茅ヶ崎海水浴は停車場の南八町の海岸にあり。旅館には茅ヶ崎館、中村樓、海水館、萬松樓、松旭閣、松本樓等あり。宿泊料比較的低廉なり。茅ヶ崎の次驛は平塚驛なり。平塚町は中郡の南端に位し、東海道中の要驛なり。其西部には花水川流れ、北方に大山のさながら那翁帽を冠りたる

がことくなるを望む。平塚海水浴は停車場の南七町にあり。旅館にはおきな家、旭亭、港屋等あり。づれも一回以下の宿料なり。風光は茅ヶ崎と相似たり。海岸に杏雲堂病院あり。町の北十餘町に入幡神社あり。關東平野の名山大山には此驛より登攀するを普通とす。これを以て夏時は白衣の行者陸續として驛を絶たず。驛を出て、北方に向ひ、伊勢原を過ぎ、上柏屋村に至る。この間三里、人車を通ず。大山町は山の麓にあり。大山は著名の高山にて海拔千八百八十米、大山町より山の頂上まで一里三十一町あり。大山町の人家は斜阪に従つて相並び、旅店に翠浪閣、伊豆屋、駒屋、玉木、平野屋等あり。宿泊料五六十錢なり。山頂に雨降神社あり。往昔石尊大權現と稱したるもの祭神は大山祇命、神體は一箇の岩石なり。相傳ふ、日本武尊東征の時

此石の上を上りて國見をたまひしところと。維新前は佛に歸し、山中寺院多かりしも今は全く神道に歸せり。町を去り、一の華表を過ぎて、路兩岐に分る。急なるを男坂といひ、緩なるを女坂といふ。而して其の合せる處は關東平野の池田に二重の瀧、夏辨の瀧、大瀧等あり。山内より汽車は全く海岸に近く、大磯附近に至れば路は丘陵の半腹を通り、平塚驛より汽車は全く海岸に近く、大磯附近に至れば路は丘陵の半腹を通じて高く眼下に海岸の漁村、蟹戸と萬頃、澎湃たる烟波とを望む。大磯町は本邦に於ける海水浴の元祖とも稱すべく、其名は噴々として世に聞ゆ。其起源は明治十九年軍醫總監松本順が海水浴の人躰營養に功あるを論じ、此地を以て冷浴場に充て、且つ有志者を謀りて、龍館なるものを新築せしに始まる。爾來繁華は更に一層の繁華を來し、高樓大厦は次第に山涯水隈に遍ねく、現今は貴紳の別墅甚だ多し。海岸の眺望は稍々平凡なれど、東方松林のある邊は稍々佳なり。町を通ぜる街路には、玉突き、寄席等の遊戯場を始め、料理店もまた多く、夏の夜などは殆ど東京の一街を此處に移



したるが如き觀あり。又藝者數十名ありて、絃歌の聲常に絶えず。旅館は鶴龍館、招仙閣、長生館、松林館は第一流にして、これに次ぎて甲喜樓、山本樓、百足屋、石井、角半、宮代屋、富士見館あり。其他中村屋、かき屋、松木、油屋等あり、有名なる地だけに、宿泊料高く、上等にて一圓五六十錢位、中等にて一圓、下等にて七十錢位なり。此處には伊藤侯爵の別荘を始め、當路有力者の別荘多ければ、時によりては、政治界に於ける必要なる地として人口に唱へらるゝことあり。停車場の西五町驛の西端に鴨立澤あり。僧西行が「心なき身にもあはれは知られけり鴨立澤の秋の夕暮」と詠じたる有名なる地なり。地に西行庵あり。西行法師の木像を安んじたり。堂は寛永中、俳諧師三千風の建てたる處なり。其他境内に虎子石あり、鴨立堂あり。町の東北に、高麗山の一丘あり。山頂に同名の神社あり。眺望絶佳なり。町の東に花水川流る。花不見川の誤謚にして、源頼朝の古蹟なり。名物に筆草、五色石、虎子饅頭、さぐれ石等あり。町の西二十町に、相模國府の跡あり、今に國府村の名を存せり、路傍に六所明神の社あり。大磯小磯の濱は、松原多くして風光好し。昔、東海道中にありて、海岸の風光の美

を以て有名なる勝地なり。好事者は大磯より國府津に散歩するも可ならん。里程三里。大磯より二の宮驛を過ぐれば國府津驛なり。停車場より海岸の松並木見ゆ。西を見れば箱根の連山漸く近く、旅客の他驛に比して降るもの多きを認めむ。ことに西洋人の群、貴紳士女など多し。これ皆な箱根温泉に趣かんとせるものなり。國府津に海水浴場あり。葛屋、國府津館等あり。宿料一圓以下七十錢位。汽車はこれより西北に迂回し、弓弦のごとき線を描きて、酒匂川の上流を過ぎ、次第に足柄の山翠に近づく。

(四) 箱根の諸勝

酒匂川—小田原町—湯本—塔の澤—堂ヶ島—宮の下—底倉—木賀—其他山中の諸温泉—芦の湯—芦の湖—箱根蘆道—國府津にて汽車を下れば、其前に電氣鐵道會社支店あり。汽車の時間毎に電車



地勢は北西南三方は峻山峻峯蟠廻し東西には平坦の地を控へ自ら分水嶺をなし其の水流の東部一般は相模灘に注ぎ西部は盡く駿河灣に注ぐ。此の分水嶺は所謂函嶺の關門にして關東關西の境域をなすものなり。前記せる金時山駒ヶ岳明神山等は地學者の所謂箱根火山に屬するものにして、今は山紫水明文墨客の節を曳き紳士淑女の暑を避くる所なるも曾ては灰を降らし熔岩を流がしたる焦熱地獄の地なりしなり。東海道を過ぐるの旅客若し佐野驛頭に佇立し東の方嶺を望まば山頂は多少の凸凹あるも略一定の高距を有し緩慢たる裾野は遠く南方に連亘するの成層火山特有の山貌を呈するを見るべし。而して尙ほ進んで稍高き處より望めば平扁なる切斷圓錐形上更に二三の峯巒屹立するを見るべし。是れ即ち二重式火山の特徴にして平扁なる切斷圓錐形を呈するは箱根の舊火山口にして、其の中に二三の秀峯を見るは後に舊火山口内に更に噴起せる謂はゆる中央

發着し、一時間を経れば箱根山中の人となるを得べし。停留場は酒匂、小田原湯本なり。貸籠は國府津湯本間一、八十錢、二、五十錢、三、廿五錢なり。箱根山は關東と中部とを連接せる一山脈にして、其山水は頗る美しく、日光と共に本邦に冠絶す。山中の湖あり、其風光の明媚なるは中禪寺湖と其勝を競ふに足るべく、二子山駒ヶ嶽等皆な登臨の勝を具へて頗る旅客の思を惹くに堪ゆ。ことに此山中に珍重すべきは日光遠く其後に隱若たり。舊箱根街道は湯本より須雲川の流に於ては日光遠く其後に隱若たり。湖の岸を掠めて直ちに伊豆地方に下り、大日本地誌の編者記して曰く、足柄箱根の群山は北より南に走り、伊豆半島に亘り、矢倉嶽、金時山、駒ヶ嶽、三十八米最も諸山之これに屬し、其の中央冠岳一千二百米の南方神山一千四百界をなす。道志、高木、此れ等の諸山は相模灘及び駿河灣に注げる諸川の分水界なり。



火口丘なり。舊火口は火山學上之れを外輪山と稱し、其の傾斜は外側に緩  
にして内側に急なるを常とす。箱根に於ては外部の傾斜は大約七乃至十  
二度にして内壁は三十五度に達す。此の舊火口は卵形をなし東西に短く、  
南北に長じ。彼の金時山、明神山、明星山、鞍掛山、山伏峠、三國山、湖尻峠、長尾峠、  
乙女峠等は外輪山にして、双子山、神駒ヶ岳は中央火口丘なり。外輪山は  
其の生成の當時は表面甚だしき凸凹なかりしも、連綿たる浸蝕風化の兩作  
用は間断なく相働いて弱所を穿ち、遂に今日の如き形状を呈するに至りし  
なり。一度低所を生ずれば雨水は之れに沿ふて流れ、溪谷を作り谷を穿ち、遂  
には滔々たる大河を爲して海に注ぐに至る。圓錐形を爲せる火山には此  
れ等の浸蝕谷は輻射状を爲して四方に放散するを常とす。早川、須雲川、谷  
入澤の如き即ち之れなり。舊火口内に更に新火口を生ずれば其の間、  
ら多少の低地を生ぜざるを得ず。此の外輪山と中央火口丘との間の低地

を火口原と稱し、山水明媚なる蘆湖、斑牛の徘徊せる仙石原、玉蜀黍茂る宮城  
野、池尻是れなり。蘆の湖の如き火口原内に雨水相集まりて外輪山の弱點を破り、流水出づる  
原湖と稱す。火口原内の雨水相集まりて外輪山の弱點を破り、流水出づる  
所を火口瀨と稱す。早川及び須雲川是れなり。火口瀨は能く外輪山の絶  
壁を露はし、其の構造を知るに足るべきものなり。早川火口瀨は源を蘆湖  
の北端、湖尻より發し、仙石火口原を灌漑し、銚子の口に於て一瀉絶壁を下り、  
宮城野火口原に入り、底倉にて蛇骨川を合せ、東部外輪山の明星淺間兩山の  
間を過ぎ、湯本に於て須雲川火口瀨と會す。七湯中蘆湯を除き、其の他は盡  
く此の溪間にあり。須雲川火口瀨は源を鞍掛山の北方に發し、要害山の南  
谷大澤を過ぎ、畑宿に到りて瀧坂の一水を集め、湯本に於て早川と會す。箱  
根産物の一たる山葵は多く此の溪間に産し、前世界動物の遺物たる山椒魚  
亦茲に産す。下双子山は中央火口丘中最南部にある美麗の圓錐形を爲せ



る山にして平林理學士に従へば一の乳房山にして頂上に一大火口あり。傾斜極めて急峻なり。上双子山は下双子山と相並び所謂双子の有様を呈するものにして亦是れ美麗なる圓錐形を爲せる乳房山なり。傾斜亦前者の如く急峻なり。神山は殆ど舊火口の中央に位し山體は火口丘中最大なるも數爆裂作用の爲めに山體を破壊せられ今は冠岳早雲山臺ヶ岳等の幾多の峯頭に分かる。中央の神山は海拔一千四百三十八米に達し實に箱根火山中の最高點なり。此の故に天晴れ氣清むの日節を神山の頂上に曳かば八面玲瓏たる芙蓉峯は固より箱根の外輪山中央火口丘等一望の下に集まる。大湧谷及び早雲地獄の硫質噴汽孔は其の山腹にあり。駒ヶ岳は神山の南にありて完全なる鐘狀を呈し亦是れ一個の二重式火山にして火口丘中其の噴出最も新らしきものなり。東麓に硫黄山及び湯の花澤の噴氣孔あり。湯の花澤は今は硫氣噴出せず。箱根には種々の噴氣孔あり。

湧谷早雲地獄硫黄山湯の花澤は亞硫酸瓦斯若くは硫化水素瓦斯を噴出する硫質噴氣孔にして小湧谷は重も水蒸氣を發する水蒸氣孔なり。殊に其の活動の最も激甚にして作用の最も活潑なるは大湧谷にして瓦斯の噴氣が岩石を震爛せしむるの有様も歴々之れを見るを得べし。』と蓋し關東地方屈指の勝地なり。

今此の遊覽の順序を記せん。

國府津より電車に乗すれば直ちに酒匂川を渡りて酒匂に至る。酒匂海水浴は東海岸の松林中にあり。旅客松濤閣あり。離坐數十數棟を建て、避暑客に貸與す。府の大小に依り一ヶ月七圓より三四十圓の等差あり。

酒匂より小田原へは二十分餘にして達すべし。

小田原町は早川の流を南に帯び西は箱根の連山連亘し北は足柄の諸峯これをめぐり東南一帯は渺漠たる相摸灘に面す。道路四通眞に天然の要地なり。宜なり北條早雲が據つて以て覇を關八州の地に唱へたることや。





人口一萬六千餘を有せり。東海鐵道は國府津を掠めて西北走し町に停車場を置かざりしを以て繁華昔の如くならざれども箱根熱海等の避暑地への衝に當れるを以て猶全く衰頽するに至らず。

國府津より電車賃一等四十錢二等二十五錢三等十三錢電車の停車場は町の中央より稍西に寄りし處なり。此附近に熱海地方に通ずる人車鐵道あり。此貨町は最も繁華なる處は幸町萬年町。

小田原舊城址は町の北にあり。北條氏か秀吉の大軍を引受て防戦せし遺蹟なり。城主の祖先を祀れる報德神社と大久保氏(維新前まで)の歴代を以て近來稱々人に知らる。大久保神社とあり。其北に山峯の梅林あり。早咲旅館は鷗盟館を第一とし中松屋小伊勢屋片野屋等あり。宿料八十錢位鮮魚多名産にいかの鹽から梅干柿餅等あり。

この小田原町は其繁華次第に昔より減退せしにて北條時代の繁華は徳川時代の繁華に越え徳川時代の繁華は今の華繁に超ゆること數倍なりし





人口一萬六千餘を有せり。東海鐵道は國府津を掠めて西北走し町に停車場を置かざりしを以て繁華昔の如くならざれども箱根熱海等の避暑地への衝に當れるを以て猶全く衰頹するに至らず。

國府津より電車賃一等四十錢二等二十五錢三等十三錢、電車の停車場は町の中  
央より稍西に寄りし處なり。此附近に熱海地方に通ずる人車鐵道あり。此貨  
錢は熱海まで三等六十八錢とす。此附近に熱海地方に通ずる人車鐵道あり。此貨  
町の最も繁華なる處は幸町、萬年町。  
小田原舊城址は町の北にあり。北條氏が秀吉の大軍を引受て防戦せし遺蹟な  
り。城址の一隅に二宮尊徳翁を祀れる報徳神社と大久保氏(維新前までの歴代  
の城主なり)の祖先を祀れる大久保神社とあり。其北に山峯の梅林あり。早咲  
旅館は鷗盟館を第一とし、中松屋、小伊勢屋、片野屋等あり。宿料八十錢位、鮮魚多  
し。名産に、いかの鹽から、梅干、柿餅等あり。

この小田原町は其繁華次第に昔より減退せしにて、北條時代の繁華は徳  
川時代の繁華に越え、徳川時代の繁華は今の華繁に超ゆること數倍なりし



と言へば往昔はいかに關東地方の大都たりしかを想像し得べし。  
小田原町を去りて西に向へば函嶺の翠微は次第に近き來りて早川の峽  
流は其の左を流れ、往昔の東海道之路は右を通じて、遂に箱根七湯の一なる  
湯本温泉の人家高樓の集れるを認む。

湯本温泉は單純泉にして無色透明、温度は攝氏の四十四度五分を保つ。湯阪山  
の麓、岩石の間より湧出するを、旅館管を以てこれを引く。早川の流の潺湲たる上に  
電車鐵道停留場を下げれば、宿屋の客引多く客を迎ふ。此地第一の福住樓なり。に  
架したる鐵橋を渡れば、對岸に宏壯なる旅店あり、これ此地第一の福住樓なり。に  
旭橋より東海道、温泉道の二路岐る。一は左し、一は右す。東海道をたれば、須  
雲川上より來り流に、早川の流に合す。陽阪山の麓に玉座の瀑あり。瀑として  
は平凡にして見るに足らず。菫道を猶少し上れば、水力電氣發源地あり。導水  
工事甚だ盛なり。湯本の西南に早雲寺、曾我堂あり。前者には北條早雲の像を  
安んず。  
旅館は前の福住の他、玉の湯等あり。宿料一圓以上。設備完全にして浴槽は花  
崗石を以てこれを疊み、一浴の快忘るべからざるものあり。  
名産は湯本細工あり。



湯本温泉より早川の流を右にして山中に入ること五六町箱根七湯の第一に位せる塔の澤温泉に達す。此地既に全く山中にて四面只山影溪聲浴架し初を玉の緒橋といふ奥なるを千歳橋と名づく。

塔の澤温泉は單純泉にして湧出所絶て五ヶ所あり。温度は攝氏の四十七度三分あり。宿料一圓内外。温泉宿は環翠樓玉の湯清涼館福住新玉の湯一の湯此地水力電氣を利用し夜は電燈燦然人をして身の山中にあるを覺えざらしむ。勝蔵山は清容の激賞して命名せしところ。

塔の澤を出れば山路漸く仰ぎ早川の流は次第に深谷の底に落ち山廻りより轉ずること幾回遂に前に函嶺屈指の溪山の美を展開するに至る。これより太平臺に至る約二里程此間溪山皆色を生じ水聲四面に反響して一歩に一景を生ずるの趣きあり。宮の下温泉はこれを距ること一里餘地は深谷中の臺地にありて海面を抜くこと一千百二十三尺南西北の三方は群山

圍繞し東方諸巒の盡くる間より遙かに相模灘を望みその風光の閑雅なる空氣の清新なる旅館の宏壯なる七湯中實に第一に位す。

泉質は弱性鹽類泉にして透明無色なり。富士屋と稱する旅館は西洋人を目的として建てたるもの、洋風の建築にして宏壯を極め電燈あり長距離電話あり其設備至れり盡せり。宜なり、西洋人は一時稱して東洋第一のホテルと爲せしことや。

湯本塔の澤より人車及び監輿を通ず。地に郵便電信局電話交換所あり蓋し山中の一小都會を爲せるといふも過言にあらざるべし。旅館奈其屋また大なり。

堂島温泉は早川の谷の底にありて其繁華前二者に及ばざれども其地の深遠なると瀑布の多きことは蓋し諸温泉にすぐれたるべし。此地より箱根群山中の明星嶽に登攀するの路あり。

明星ヶ嶽に登るには堂島より溪流を渡り右折して左折し一時間半にして其山頂に達す眺望壯麗富士山の直前なる山脈の低處は御尉峠にして右に金時山、明神嶽、後に大山丹澤山酒匂川の平原を越えて連續せる丘陵を見る更に數間を退けば小田原市街大島を浮べたる太平洋其右に石垣山二子山駒嶽神山臺嶽を望む神山より白煙蒸騰するものは早雲地獄の硫氣孔なり夫れより遙に背空に



樂立するは足高山なり、此の如き眺望は日出日没の際なるを以て、早朝若しくは夜中の行路を取らざる可からず、故に提灯を用意す可し、歸路宮城野より木賀に  
 入れば前路より峻なり、此登山は軟弱者及び炎天には勸告する能はず、山頂に休  
 憩する時間を加へ三時間半にして足る、  
 底倉温泉は宮の下の上部とも稱すべく、旅亭の瓦葺相連り、泉質また宮の  
 下に同じ。温泉宿は蛇骨川の兩岸に跨り、中間の橋を萬年橋といふ。橋は  
 高く、溪は低く、風景尋常ならず。  
 此温泉の旅店中、南岸にあるを梅屋、仙石屋と爲し、北岸にあるを藤屋と稱す。宿  
 泊料湯本、宮の下に比して低廉なり。  
 萬年橋の溪底に太閤の石風呂なるものあり。傳へ言ふ、豐太閤小田原征伐の時  
 浴したるものなりと。  
 此地より路は二岐に分れ、左蛇骨川に沿うて上れば小涌谷蘆の湯を経て  
 箱根町に至るべく、右橋を渡り、宮城野川に沿うて行けば、木賀、強羅、仙石原、姥  
 子の諸温泉に達するを得べし。  
 先づ右路を取れば、六町餘にして木賀温泉に達す。兩傍の翠微來りて人

を壓し、溪流其間を走りて、岩石に激し、其風景の美蓋し名状すべからざるも  
 のなり。函嶺山水のすぐれたるもの、一と稱せらる。  
 温泉宿、龜屋、仙石屋。  
 木賀より猶上ること五六町にして、一帯の小平地あり。人家五六十、これ  
 を宮城野村と爲す。  
 宮城野に名物蕎麥あり。味頗る佳なり。  
 宮城野より猶西すれば一里にして仙石原に至る。此地温泉あり。され  
 ど地既に僻遠にして遊客至るなく設備完からず。これより西北行すれば  
 御尉峠に出づ。駿河御殿場に出づる捷路にして、富士を見るの一勝地とし  
 て有名なり。  
 宮城野より早雲山を攀れば、登ること一里にして強羅温泉あり。近年開  
 業したるものにして、早雲館一戸あるのみなれど、地の幽邃なるを以て來り  
 浴するもの尠なからず。物價また廉なり。



強羅より冠岳の半腹を繞り急阪を上ること二十町許にして大涌谷に至る。一に大地獄といふ。これ即ち箱根火山に於ける硫氣洞にして處々に硫氣を迸出し、白烟騰上して常に轟々の響を聞く。地面極めて脆弱にして茶褐色を呈し、誤つてこれに陥る時は忽ち爛死するの危険ありといふ。蓋し箱根山中最も物凄き境なり。此地より箱根火山中最高峰なり神山(標高四千七百四十八尺)に登攀する路あり。其登路を記せん。

大地獄の道より二の平村を經、湯の花澤を過ぎ、屈曲せる山徑を登り、小涌谷に歸へるを可とす。上り健脚者二時間半なり、故に山頂の休憩と下路とを加へて五時間要す。行路極めて峻峻、婦人の登攀に適せず。初め長草次に荊棘の間を衝き、高火口を過ぎ、山頂に達す。眺絶佳、近傍に冠たり。富士山北西に望む右に甲斐の白雲、霞々たる峯頂併列し、左に信濃の連山、足高山、駿河灣の碧色、其海濱に伊豆半島、熱海、清水灣、三保松原の松樹、亂立せる砂線、更に天城山脈の連亘せる小田原市街、相模灣、酒匂川、江の島、三崎を越えて安房の洲の崎を下瞰す。箱根山脈は悉く脚下に横集

し、其南方の叢生せるものは駒嶽、其後方なるものは二子山、長壁の如く併列せる山の脈の三低處は、御厨崎、長尾崎、ふから崎なり、實に一大パノラマの觀あり。小涌谷は宮城野の附近にあり。舊時は小地獄と稱し、熱湯沸々地上に湧出せし、今は其地に温泉宿三河屋あり。浴舎の構造壯大にして、料理は和洋の二食を準備し、玉突臺の設備あり。七湯の中には加はらざれども、亦遊客の一浴すべき地たり。地幽邃にして、紅塵至らず。

附近に千條の瀧あり。瀑小なれど、又一見の價あり。底倉より左して蛇骨川に沿ふの一路は、此處に至りて小涌谷より下り來れる道路と合し、或は峡谷の間を縫ひ、或は山腹の傍を掠めて、かくて登る。この一里、廣濶たる臺地に至れば、二子山は前に高く、駒ヶ嶽は右に聳えて、箱根の舊道を有する深谷は左に長く連り渡り、其の兩山の盡る處、相摸の海の渺々たるを見る。



此の高原の北角に七湯の最奥なる芦の湯温泉あり。此の高原は尾花多く秋の草花もまた少なからず晩夏の候は爛開して最も美なり。大抵単純なる此地のみは硫黄泉にして人は此地に近くや其の臭氣の甚しく鼻を襲ふを覺ゆべし。温泉宿は元五戸なりしも今は松阪屋紀伊國屋の二に過ぎず。就中松阪屋は設備最も完全にして客室また多くよく數百人を容るゝに足る。且洋客の爲めには洋館を設け食堂の構造食器の設備紳士的にも平民的にも望むまゝにこれに應じ日本料理の魚肉も三島小田原兩地より供給するを以て山中に似合はず新鮮なるものを食するを得べし。又二子山の頂に二子園あり。以て客の登臨に供せり。湯の花は蘆の湯を去る五町餘近年開かれたる温泉にして蘆の湯の源泉地なり。湯の花と稱する一軒の旅店あり。湯の花を採つて乾燥し四方に販賣す。

蘆の湯より八町精進ヶ沼に沿ひ右の山裾を折れて上る。半腹より路漸く険なり。頂上に至るまで二時間要すべし。頂上は可なり尖鋭ならず。草深けれど木は稀なり。前に神山登立せるが爲め遠望甚だ可なり。眼下に二重圓錐を低立及び富士山、甲斐白嶺、天守山脈等を望み、二子山の如きは眼下に二重圓錐を低立し、伊豆の諸島を瞰下し得べし。山嶺二個の噴火口あり。一は北方に長徑百尺短徑之半を爲す卵形を爲し、深さ四尺あり。一は南方に長徑八十尺短徑三十尺の楕圓形を爲し、深さ三尺を有す。共に近代噴出したる岩塊及び火山礫を以て、碓氷、地荒びて草木を生せず、四周に玄武岩を顯はす。蘆の湯方面より上り、始終湖水を下瞰して箱根権現側に下るをよしとす(小島烏水氏による)。芦の湯を出て、行くこと數町、賽の河原と稱する地あり。岩石磊塊たり。これより二子山の右側面をたどりて、高原の中に通ずる蜿蜒たる道路を行けば、頃刻にして眼界開け、前に箱根の蕭疎たる古驛と深碧染むるかごとき芦の湖とを俯瞰すべし。眺望頗る佳なり。其の一角に、夏時は休茶屋あり。ラム子、及び菓物を賣る。







會義仲を迫討の時、軍勢足柄箱根兩路にかゝりて走上れり、文治四年九月、岡崎  
耶義實の郎等山麓にて合戦あり、承久の亂に鎌倉方足柄箱根の兩道  
切塞ぎ固め、敵を待て、山賊あるべき由評議あり、寂法師關東下向、山  
の兩路にて工藤家集に、見ゆ、仁治三年、前河内守親行、戴の警を  
阿佛が十六夜、日藤経を、足柄山へ、道治、遠なるを以て當處に、  
應二年九月、北條親王の、時、久明親王、山を、上洛す、武  
元、先將軍、維康、親王の、時、足利、氏、討、手、を、避、て、箱、根、路、に、  
水、飲、峠、又、大、崩、に、て、合、戦、あり、平、氏、討、手、を、避、て、箱、根、路、に、  
と、根、路、を、支、へ、尊、氏、は、足、柄、越、し、大、將、義、貞、等、を、將、親、王、を、奉、じ、  
箱、根、路、を、支、へ、尊、氏、は、足、柄、越、し、大、將、義、貞、等、を、將、親、王、を、奉、じ、  
門、佐、義、助、等、馳、向、ふ、箱、根、越、し、大、將、義、貞、等、を、將、親、王、を、奉、じ、  
貞、勝、利、を、得、たり、亂、れ、鎌、倉、中、勢、に、逆、せ、し、義、貞、等、を、將、親、王、を、奉、じ、  
十、月、上、杉、禪、秀、の、亂、れ、鎌、倉、中、勢、に、逆、せ、し、義、貞、等、を、將、親、王、を、奉、じ、  
此、山、の、時、持、氏、方、の、軍、兵、山、中、持、氏、京、勢、に、逆、せ、し、義、貞、等、を、將、親、王、を、奉、じ、  
ず、十、八、年、聖、護、院、道、興、准、后、二、年、太、田、資、入、道、灌、上、洛、の、時、幼、春、王、安、王、  
田、原、に、寓、居、せ、し、頃、或、曉、山、中、の、雪、景、を、見、ゆ、れ、ど、其、慥、なる、事、は、今、  
革、あり、て、今、の、道、と、は、大、に、遠、し、と、見、ゆ、れ、ど、其、慥、なる、事、は、今、

るに、往昔は湯木村より湯坂を登り、城山の峠を通じ、四方山端より鷹巢山の上  
を、歴、蕨、野、湯、へ、か、り、元、箱、根、に、出、し、と、なり、今、も、山、の、頂、に、樵、夫、の、細、徑、あり、其、後、又  
路、革、り、東、海、道、權、現、坂、より、北、に、折、二、子、山、の、西、麓、より、元、賽、河、原、に、か、り、姥、子、の、邊  
より、蘆、湖、の、北、涯、を、す、ぎ、夫、より、北、に、折、二、子、山、の、西、麓、より、元、賽、河、原、に、か、り、姥、子、の、邊  
箱、根、と、見、ゆ、然、る、に、箱、根、新、關、の、東、北、涯、に、添、神、宮、山、の、麓、に、今、の、道、を、官、路、と、せ、ら  
せ、し、と、見、ゆ、然、る、に、箱、根、新、關、の、東、北、涯、に、添、神、宮、山、の、麓、に、今、の、道、を、官、路、と、せ、ら  
葦、山、に、働、き、し、條、に、據、か、れ、し、に、は、あ、ら、ず、甲、陽、軍、艦、永、祿、十、三、年、九、月、武、田、信、玄、豆、州  
根、宿、を、置、れ、し、は、元、和、四、年、其、既、に、徑、路、の、往、來、は、あ、り、し、な、り、今、の、如、く、大、路、を、開、き、箱  
來、此、道、東、海、道、の、官、路、に、し、て、足、柄、越、の、道、は、全、く、間、道、と、な、り、大、抵、此、頃、の、事、な、る、べ、し、而  
へ、の、往、來、に、當、れ、り、寛、永、十、一、年、六、月、大、猷、院、殿、御、上、洛、の、路、次、此、山、に、か、り、甲、州、信、州、邊  
箱、根、驛、より、伊、豆、の、三、島、驛、ま、て、里、數、三、里、二、十、八、町、驛、より、三、四、町、ほ、ど、湖、水  
の、東、岸、を、繞、り、て、上、れ、ば、相、豆、兩、國、の、境、界、標、あり、。これ、より、山、中、笹、原、三、ツ、屋  
の、立、場、あり、。され、ど、今、は、こ、の、間、に、往、來、す、る、も、の、稀、に、路、は、全、く、荒、草、の、繁  
る、所、と、な、れ、り、。此、里、程、五、里



餘にして中央に日金山十國峠の勝あり。先づ驛より登ると半里これより馬の脊のごとき鞍掛山の絶頂を西南にたどる。概して草原にて森林帯少し。されど此間には山蛭多く五月雨の候は旅人の其害を被むるもの多しと聞く。されど夏時晴天にはさる恐なしとぞ。かくてこの長き山の脊を進むこと二里餘右の深谷次第に開けて伊豆駿河の灣はさながら手に取るごとく天城の連山の蜿蜒として海中に盡くるさま一幅の畫圖の如し。而してこの風景は一步毎に次第に趣を加へて十國の一覽の碑の立てあたりに至れば天下の大觀この一望の下に集ると言ひても差支なきばかりの好景なり。西は富岳の雲烟東は伊豆の東海岸より房總の翠螺南は伊豆七島の有るか無きかの影まこと十州を望むとて昔の人のあくがれしも道理なりと思はるゝばかりなり。されど夏は雲霧深くして容易に此の大觀を見ず旅客は秋晴の日を選びて此處に遊ぶをよしとす。

これより熱海まで下り二里。箱根と日光とは本邦有名なる山水郷なり。(勿論深山僻地にはこれよりもすぐれたる山も水も多けれど都人の容易に至り得べき地としては、今此二者の比較を爲んに山水の中心を爲さる湖水は中禪寺湖の湖共に優劣なしとせん。中禪寺湖は稍々清寂に過ぎ、芦の湖は稍々卑近に陥る。されど其明媚なるは一なり。日光には箱根の温泉なく箱根には日光の瀑布なし。日光の殿堂の美は人多くこれを説ども箱根の交通に便にして山の珍味座ながらにして至り、絃歌の聲湧くが如くなるの繁華は、これもこれを日光の何れの處にか求めん。箱根に遊ぶに慣れたるものは曰く「箱根は便利で面白い」と。日光に遊ぶに慣れたる者は曰く「日光の景色は實に忘ら



れぬ」と。これ即ち箱根に避暑客の多き所以にして、日光に遊覧者の多き所以なり。山水の規模の大なるはわれ日光に與せん。遊浴の快樂の多きはわれ箱根に與せん。日光は僻箱根は俗日光は幽寂を以て勝り箱根は繁華を以て勝ると謂ふべきか。

(五) 伊豆半島

熱海—伊豆山—伊東—修善寺—伊豆の東海岸—下田港—伊豆の西海岸

今少時東海鐵道を離れて伊豆半島を一周せん。小田原より大車鐵道に乗れば風景すぐれたる伊豆の東海岸に沿ひつゝ十六哩十二鎖にして伊豆東海岸の一勝地熱海に達すべし。此間米神江の浦、真鶴、吉濱、門川、伊豆山等の入車停留場あり。乗車賃六十六錢にして一日に七回づゝ小田原と熱海とより發車す。源頼朝の始めて大庭景親小田原より一里に足らず、石橋村の西に石橋山あり。

と交戦して敗北したる地なり。山上眺望好よし。眞鶴岬は頼朝が石橋山に敗れて、主従七騎安房に向ひて走りし港にしく、今海水浴場あり。眞鶴樓と稱する旅館あり。吉濱の沿岸風景甚だ佳なり。門川停留場より下り右折して、阪路廿八町を登れば湯河原温泉あり。藤木川の両岸に温泉湧出し、地は幽靜あり。温泉宿には伊藤、三河屋、梅屋、藤田屋、二階堂等あり。宿料比較的低廉なり。日金山の勝此地より登るべし。登路五十町。伊豆山温泉は伊豆山停留場より下車すべし。後に伊豆山の翠微を帯び温泉宿(江島屋、相模屋等)は海濱に軒をつらねたり。硫黄泉にして婦人生殖器病胃腸病によし。伊豆山の半腹に伊豆権現あり。眺望甚だ佳なり。此神社は昔時は關東の武將の總鎮守として威力ありしものなり。熱海温泉は其歴史甚だ古く世人これを知らぬはなし。蓋し東海の濱に於て最も人口に膾炙したるものなるべし。冬は暖かく夏は涼しく避暑避寒共に宜しからざるなし。之に加ふるに旅舎の設備甚だ完全に費用また低廉なるを以て、浴客の來り遊ぶもの多く、眞にこの伊豆半島東海岸に於ける一別區を成せり。近來肺病患者の來浴多く従つて其繁華稍々衰退せし



ごとき傾向なれど、猶旅客は一遊せざるべからざる地なるは論なし。ことに間歇泉は陸前鬼首温泉と共に本邦稀に見る所にして、頗る奇観なり。此地の前に開けたる海は、さして風景に富まざれども、浴樓皆な高き丘陵に凭りて建てられたれば、いづれの二階よりも多くは、其の初島の畫くがごとき青螺網代岬の海中に突出したるさまを見るべく、晴日には三浦半島の海中に突出せるをも指點すべし。大島に於ける三原山の噴烟も亦指顧中にあり。

町の人口五千。温泉宿は富士屋、相模屋、眞誠社、氣象萬千樓、大光館、鈴木屋、朝日屋、露木、小松屋、尾張屋、古尾、高砂屋、山田屋、其他にあるもの數ふるに遑あらず。此地又海上より來るべき便あり。即ち京橋船松町より東京灣汽船會社の汽船に乗ずれば七時間ほどにて達すべし。貸錢三等七十錢なり。されど風濤の憂なきにあらざり。熱海公園は町の南方にあり。地に梅園あり。早咲を以て有名なり。其他温泉神社あり。

日金山へは登路五十町、一町毎に石佛を立つ。其の盡く所に、一寺あり。又山越にて修善寺に至るべし。熱海より海岸を傳へば三里にして網代に至り、猶二里餘にして伊東に至る。此間舟あり。東京より伊東に赴くには、東京灣汽船會社の下田通ひの汽船と伊東國府津間とを通ずる汽船あれば、これに由るをよしとすべし。網代は戸數四百を有する一小漁村なれど、沿岸の風景甚だ佳なり。熱海より小舟にて舟遊すべし。伊東温泉は玖須美村、松原村にあり。湧出量甚だ多く、國中有名な温泉なり。温泉宿は樹屋、山田屋、旭屋、山本屋、前田屋、寶榮屋等あり。此地交通だに便ならず、今一層繁華を來し、都人士の入浴にも適せるなれど、如何にせん、陸には山、海は波、容易にこれに赴く能はざるを。東京より汽船十二時間を要す。土地の風俗や淫靡なり。此より修善寺、大仁、並山へ五里、下田へ十三里、いづれも人車を通せず。伊豆の東海岸に風景のすぐれたる處少なからざれども、此の半島にては寧ろ西海岸を優れりと爲す。伊豆半島は山嶽重疊して交通不便の地、今猶多く汽車も纔かに東海道三



島驛より大仁驛に至る十哩六鎖の豆相鐵道を通ずるのみ。下田に通ずる街道は半島の中央を貫き、天城山の西方を越え、直ちに下田港へ向つて駛る。今此間に於ける名勝を略記せん。修善寺温泉。此地に赴くには、大仁(豆相鐵道)に汽車を下り、狩野川を渡り、瓜生野を過ぎ、右折して桂川の流に沿ひ、少しく溯れば、其地なり。温泉の發見は極めて古く、かの源範頼が兄頼朝の爲めに幽閉せられて自殺し、後頼家も亦此處に殺されたるなど、歴史に著名なる事實なり。桂川の清溪は其中、中央を流れ、俗舎驛樓其兩岸に連る。橋に虎溪橋、江月橋の二あり。温泉は到處に湧き、泉量また多し。就中、獨鈞の湯は河中にありて、浴槽其間に設けらる。旅館には養氣館、衛生館、淺羽樓、菊屋等最も著名なり。宿料は總て木錢の制にて、廉なるは一日二三十錢より、貴きも一圓内外に過ぎず。設備已に都風に於て、よく東京の紳士をして淹留數日猶都を思はざらしむ。かゝる

山中にはめづらしき繁華なる温泉なり。桂川北岸丘上に名刹修善寺あり。什寶多し。源頼家墓は南岸の小丘上に、源範頼の墓は北岸の丘上にあり。頼家墓の附近に三州園と稱する遊園あり。園内に貸席をかねたる指月館あり。船原温泉は大平附近にあり。旅館一戸、鈴木。嵯峨温泉は狩野川の上流にあり。旅館湯木樓。湯ヶ島温泉は前者の上流十二町餘にあり。境甚だ幽邃にして、また都人士の滯留するに適す。其他、四平温泉、吉奈温泉あり。古奈温泉あり。天城山の西方凹處を越え、湯ヶ野より小鍋須原、箕作、立野を過ぎ、遂に半島の南端下田港に達す。下田港は東に須岬を控へ、西に城山を帯び、金島灣の前面に横り、よく風浪を保障するに足るを以て、船舶常に輻輳す。人口五千餘を有し、伊豆半島第



一の都會なり。此地は徳川幕府が始めて米人の爲めに開港したる處長州の俊傑吉田松蔭の此地に於ける事蹟は皆人の知る所なり。地に郡役所區裁判所稅務署等あり。又下田船渠會社あり。今は交通の不便なるが爲め昔の如き繁華を有せざれど、夏時は毎日一回東京と往復する東京灣汽船會社の汽船と日々に伊豆の海岸の各所に寄港して沼津に至る伊豆浦汽船會社の汽船とあり。されど一旦風浪の高きに逢へば數日間航行を止むるを以て未だ信賴して以てこの便に頼ること能はざるは憾むべし。

旅亭に松木、山本阿波屋等あり。伊豆七島に往來する汽船便あり。町は淫風盛にして、曖昧たる小料理屋多し。今、開けて公園と爲し、城山公園と呼び。登臨の風甚だ佳に、晴天には伊豆の七島を天末に髣髴すべし。

下田港より伊豆半島を西に傳へば、其の海岸は多くは陡崖を爲し風景のすぐれたる處少なからず。今下田より取次に數へて以て沼津に及ばん。

彌陀窟は下田より西南二里、日野川の河口の小島にあり。其岸洞窟を爲し、潮水の東遊記に曰く、此下田より西の方に石浦といふ所あり、爰は奇異の巖窟あり、山の辰巳に向ふて指し出たる山崎にありて、岩屋の口狭ければ、潮高き時は舟を入り、れがたし、故に此巖窟に遊ぶ者潮引つめて、巖窟のあらはれ出たる時を考ふる。となり、余が友塘雨霜月の初に此地に遊びしに、折ふし風強く浪荒かりしかば、天氣を見合せ、潮を考て十五日まで逗留し、十五日に折ふし風強く浪荒かりしかば、天小潮にては又入りたけ、十五日まで逗留し、十五日に折ふし風強く浪荒かりしかば、天を客六人船頭二人を合せて都合入人、晝前より纒の小さき獵船に有り合せし諸國の計をへて彼巖窟に臨む舟人やがて舟を取直し、纒の方より逆しまに窟中にさし入る、是は穴の内狭ければ、舟の口のあかりさすゆゑ、出すべき時に順にならるべし、爲なり、扱六七間も廻れば、穴の口のあかりさすゆゑ、出すべき時に順にならるべし、南海を受たれば、浪殊に高く、穴の内の岩石に當り砕て、水玉飛散り、雨の降るごとく、舟をゆり上ゆり下す、くらさば、くらし、浪の音は穴の内には、向ふの方岩高くして、その恐ろしさはいはんかたなし、同行の者ども各念佛するばかり也、然るに忽然のごとく、明らかなに成り、打上ぐる浪、玉ちる水までも皆金色となる、船中一同に驚







我入道海水浴。牛臥山の西にあり。旅館に松風館あり。宿泊料八十錢位。  
沼津町附近は更に東海道の條に於てこれを紹介すべし。

(六) 富士山及び其附近

汽車の足柄山横断—道了権現—山北—御殿場—富士山—  
各方面の登路—富士の裾野—富士附近

東海鐵道は國府津より往昔の東海道を離れ酒匂川の流に沿ひて次第に  
足柄の翠微に近づき松田驛を過ぐ。

道了権現は松田停車場より南方二里南足柄村字關木なる最乗寺にあり。天狗  
松田驛の次驛は山北驛なり。この地は足柄山中の隧道を越ゆる準備驛  
なるを以て五分以上停車す。  
山北の鮎鱒は其味の美なること東海鐵道中第一なり。五月より十一月を好時  
節とす。

山北を去れば汽車は直ちに隧道に入る。それを出れば酒匂川の溪流右  
左に屈曲して流れ風景の美言ふべからざるものあり。かくて數箇の隧  
道を経て小山驛に至る。地に製糸會社あり。規模大なり。  
汽車は或は溪に沿ひ或は山腹を縫ひ轟々として西を指し遂に東海の白  
扇たる富岳の秀麗なる姿を前に認むるに至る。其の高原の一驛を御殿場  
驛と爲す。

停車場前に不老館、吉島屋、松屋等の旅館あり。富士行者の往來に當るを以て夏  
時は旅客多し。  
此地より御殿場を経て箱根千石原に出づる路あり。  
富士山の登路は須走口、吉田口、大宮口あれども東表口最も盛なり。而して東表  
口はこの地より至るを順路とす。即ち汽車の便によれば自然此路を取ること  
となる。御殿場より鐵道馬車ありて吉田口へ通ず。先づ此停車場より西に向  
ひ凡そ二里其地を中畑中と稱し他の登山口に比して稍容易なり。こゝを馬返  
と稱す。こゝまで馬に乗ずれば其賃五十錢位なり。又剛力と稱して登山者の  
荷物運び且つ案内を爲す。往復金七八十錢位なり。  
東表口には旅館數軒あり。登山者は是等旅店にて一切の準備を整ふべし。馬



返しより、頂上まで里程殆ど三里餘、これを十合に分ち、一合目毎に茶亭及び石室あり。休泊に便ならしむ。五合目以上は草木全くなく、六七合目に至れば砂深くして登路險なり。  
富士山は本邦第一の名山、駿河甲斐の二國に跨り、清容遠く十三州よりこれを望むことを得べし。八面玲瓏、何處より見ても其山容の正しさは、この山の殊に宇内に誇るに足るところにして、標高一萬二千四百六十七尺、山巔には千古の雪を藏せり。古人今人、此山を讚するもの少なからず。先づ山邊赤人の詠あり。「あめつちのわかれしときゆかむさひて、たかくたふときするかななるふじのたかねを、あまのはらふりさけみれば、わたるひのかげもかくろひてるつきのひかりもみえず、しらくもいゆきはかり、ときじくぞゆきはふりける、かたりつぎいひつぎゆかむふじのたかねは、遅塚麗水氏其不二の高根」に記して曰く。「静かに起ちて窓を推せば、落日袖にあり。寒星人と親しむ。微茫の中物あり、簇々として來りて石室を去る數尺の處を

過ぎる。白衣冠して白馬に騎するものあり、白幡を撃ぐるものあり、虚を渡りて聲なく寂々として行く。嶽上の鬼物、この夜、闇け人、籟絶るの時に當り出で、遊ぶなるなからんや、燈を執りてこれを照せば、馬や幡や車や、忽ち消え、青沙の如きもの袖邊を掠めて飛び、一氣あり氷よりも冷かに來りて燈を吹き滅し、一團の白氣上方に向つて去る。蓋し夜雲の行くなり。  
大靜大寂、久しく立つべからず、終に扉を鎖して寐ぬ。輕寒蒲團に上りて眠、熟し難し。曉ならざるに、短夢回りに來れば、主人は既に爐に踞して飯を炊く。余や既に萬古の雪に嗽ぎて心下に一塵事なし、靜座して以て日出を俟つ。既にして石室の主人、磨きて曰く、日將に出でんとす。起ちて扉邊の平石に踞して之を看る。始め東方昏黒の中、紫氣あり、搖曳し、漸く變じて微紅となる。余眸を凝らす、俄かにして上峰に天鷄の聲を聞く。石室の人曰く、是淺間神は降る。會々彷彿として上峰に天鷄の聲を聞く。石室の人曰く、是淺間神



社の鐸聲なりと。余屏息して立ち石室の人跪きて奉拜す。須臾にして冥中混沌のところ依稀として五彩の斑文を作し次第に鮮明を加へて光鋸陸離遂に混じて猩血の色をなす。裡に物ありて浮べり。双黄の卵子の如し。忽ち合して熔銅の色を爲す。石室の人曰くこれ太陽なりと。熔銅の色は再び變じて爛銀の色を爲し環らすに紫金を以てし終に白燃鐵の色を爲す。忽ち大鎗の一下に逢ふ如く百千道の金箭直ちに天を射り冥中猩血の色逆だち起ちてこれを追ひ太陽乃ち躍如として昇る。天地茲に清明なりと。以ていかに其の山の靈なるかを推するに足らん。富士登山者の増加せしは應仁以後にて天文永祿の頃には今川氏が登山者に關する法令を發したることあり。徳川氏に及びて愈其數を増加せしが如し。

●登路五あり。大宮口 表口なり。即ち山の正面なり。此路より登らんと欲せば東海

鐵道を鈴川驛より下車し大宮町に達する馬車鐵道に乗ずべし。中央に吉原町あり。絶えず富士の裾野を走りて風景佳なり。

●吉原町は人口五六千を有し、妓樓多し。この驛より甲州街道の一支路岐る。福泉寺に曾我兄弟の墓あり、又其の木像を藏せり。これを訪ふには厚原(馬車の一停留)より下車し、右方の舊道を行くこと數町、久澤村になり。此地に曾我祐成の妾虎御前の草庵を結びし跡あり。

●入山湖に富士製紙會社あり。大宮町は製糸製茶の産出する地、人口六千餘あり。町に有名なる淺間神社あり。松杉枝を交ふ、境内清酒なり。社の東側に湧出の池あり。清水湧出して、快言ふべからず。社の前に、旅店多し。

●大宮より一里、村山に攝社淺間神社あり。又一里、裾野を上りて八幡堂に至る。大宮より此處まで馬を通ず。

●八幡堂に富士登山株式會社といふあり。山中の茶券、食券、宿泊券を賣る。これより一里、笹坂離、更に一里にして一合目に達す。六合目に至れば草木なし。これより以上各口の光景と同じ。



大宮口の裾野をめぐれば、大宮町より西北三里、上井田村と白糸村との間に白糸  
瀧あり。風景美なり。又其附近に入穴あり。富士牧狩の跡も亦此地にあり。  
東表口 即ち御殿場なり。既にこれを御殿場の條に記せり。就いて見

るべし。  
須走口 御殿場より甲州吉田まで馬車鐵道あり。須走は其途中にあり。  
其地に米山旅館外數多の旅館ありて登山者の世話を爲す。この路には概  
して見るべきもの少し。八合目にて吉田口に合す。唯々此道路は砂滑か  
りにして走り下るに便なり。是を以て登山者は東口北口より登りて此口を  
取りて下るもの多し。  
吉田口 一に北口と稱し、所謂裏富士なるものなり。此口に至るには官  
線中央線にて甲武鐵道と連絡すにて甲州大月驛に至り、此間山水の景多し。  
甲州の猿橋も此間にあり下車して更に鐵道馬車に乗り、谷村町を過ぎて吉



欠

MISSING



場は停車場の南六町にあり。遠浅にして、天然の海水浴場を爲し老幼婦女にも危険なることなし。

旅以上東海ホテル、身延樓一碧樓、佐野屋、千歳屋、龜島樓、十文字屋等あり。宿料八十  
物産には興津鯛、魚煎餅あり。第一なるべし。  
清見寺には興津町北側の高地にあり。南方前面清見沼を隔て、三保松原の勝景  
を眼下にし眺望絶佳なり。管て英照皇太后御在世中此寺に月餘を過させ賜ひ  
東宮殿下並に眺望宮周宮兩皇女殿下にも亦曾て御滞在あらせられしことありて、  
各御手植の樹木あり。二月の頃奥羽地方より伊勢宮に來る者必ず先づ當  
地に立ち寄り此寺を見物し其れ半同所より靜岡迄も亦同じ。停車場より清見寺  
迄は凡十町餘。久能山迄路程三里半、同所より靜岡迄も亦同じ。停車場より清見寺  
三保松原は清水港の南方より東北に向ひて突出せる一里許の砂洲なり。松  
二町餘の地に三保神社あり。羽衣松は今猶あり。此地に至るには江尻停車  
場より港は特別輸出港なり。其東北に海水浴場あり。此地に至るには江尻停車



龍華寺は富士山を眺望するの勝地として名あり。所在地は村松村なり。日蓮宗の巨刹なり。境内に大蘇鐵あり。又高山樗牛氏の墓あり。

江尻の次驛は静岡市なり。

静岡市は駿河第一の都會なるのみならず、東海道中有名の市邑なり。人口四萬二千を有す。此地はもと府中と稱せられ、今川氏累代の城址なりしが、今川義元滅びて後、武田氏に歸し、武田氏の後、徳川氏之に居れり。天正十八年、徳川氏關東に移りし後、諸侯相繼ぎ、維新の際、徳川家達此地に封ぜられ、これより今の名に改む。市に静岡縣廳あり。

旅館は停車場前に大東館、管て行在所となりしことあり。此地第一等の旅館なり。宿料二圓五十錢より八十錢迄、機陽館、靜鶴樓、靜榮館、中藤屋、長生館等あり。其他、魚伊、袋屋、安田屋、上藤屋等あり。手帳屋、手帳屋、手帳屋等あり。

此の驛は大驛にして、五分以上停車場す。非常を賣る。又顔を洗ふところあり。名物にわさび漬あり。

今市中の名勝を列記せん。

淺間神社は停車場より二丁、宮ヶ崎町に在り。静岡公園にして、春季は櫻花觀覽の客、山上山下に絶えらるゝとなし。

徳願寺は停車場より凡一里、安倍郡長田村丸子にあり。當寺は徳願寺山の中段に在りて、山葵花の名所なり。春秋の季節、杖を曳くもの多し。

又、淺間神社の東北三町に臨濟寺あり。天文年中、今川義元の草創せしところに、かゝる。此の陵地は今川氏の古城址なりしといふ。

寶台院は停車場の西三町にあり。徳川家康の妾寶台院を葬りしところなり。安倍川町に妓樓あり、絃歌の聲、湧くが如し。

吐月峯は市の西北一里にありて、俳諧師宗長が其の草庵を結び、とろにして有名なり。吾人が烟草盆に用ゆる灰吹の竹筒は、此地より産するを以て、吐月峯の字を印せり。

静岡市を離るゝや、汽車は直ちには焼津に向つて走り、東海道は少しく右に偏れり。これより二里餘、宇津谷の小山脈北より南に來り、此處に街道は宇津谷峠をつくり、汽車はこの南に一角の隧道を穿ちて過ぐ。宇津谷峠は伊勢物語に、宇津の山邊のうつゝにも夢にも人逢はぬなりけりと歌ひしところにて、其の古蹟は街道より少しく山に入りたる處に残れり。

久能山は久能村根古屋にあり。山高からざれども、險要の地にして風景



また佳し。山上の東照宮は家康永眠のところ、下野の日光廟と共に別格官  
 幣社たり。數百の石燈高く廟宇に接し、境甚だ瀟洒たり。彫樓の美は日光  
 廟に比して一籌を輸し、雖も亦見るべきものなきにあらず。  
 静岡より二里三十町、清水江尻よりいづれも二里、龍華寺より一里位なり。静岡  
 江尻共に俵賃四十錢、往復六十錢位と思へば、間違なかん。  
 旅店石橋豆腐屋、石垣屋あり。宿料六七十錢。  
 東海道は静岡市より稍西北に偏りて、宇津谷峠を越え、鐵道はこれより少  
 しく南に距り、長大なる二個の隧道を過ぎて、焼津驛にと達す。  
 燒津は日本武尊の草薙劍を拂ひて、賊の火を消したる所なり。其紀念として、今  
 燒津神社あり。  
 停車場の東九町の海岸に海水浴場あり。秋月樓。宿料六十錢より一圓半位。  
 藤枝町は志田郡中の一中心地にして、人口九千を有せり。停車場より町まで二  
 十町を隔つ。停車場前に白木屋、背島樓、宮本樓本驛に飾傳樓、魚安樓あり。町に、  
 熊谷直實の剃髮せしといふ遊生寺あり。清水寺は町を隔つる十町、聖武天皇の  
 宸翰を有するを以て著名なり。

志太・鐵泉は山間に噴出し、胃病、子宮病、脚氣、皮膚病等に効驗著し、有名の鐵泉に  
 して浴場湖生館は本店支店二館あり。土地幽邃、閑雅、浴室清潔、宏壯なり。本店  
 は中等以上、客に適す。鐵泉の傍りに天然瓦斯噴出、夜間點燈の料となす。停  
 車場より凡二十丁、背島村、宇志田に在り。料理一品八九錢、乃至十二錢にして、宿  
 泊料は大凡五六十錢より一圓位。  
 藤枝町より二里餘にして、島田驛に至る。驛西臺地長く連り、其北には小  
 丘陵相起伏し、東南は海波浩蕩、而して此間を有名なるかの大井川は横ざま  
 に流れ行けり。川は源を甲駿の界なる白峯附近に發し、屈曲して山地を出  
 て、駿遠の扇狀平野を貫流し、金谷島田兩驛の間を経て、駿河灣に注ぐ。沿岸  
 平地少く、水勢急なるを以て、灌漑の便なく。扁舟またこれと通ずること能  
 はず。かの往昔の東海道中に於ても、此川ほど交通の便を礙げたるものな  
 らば、一たび洪水岸を嚙に至れば、旅客は兩岸の驛次に淹留して、以て水の減ず  
 るを待たざるべからざりき。且有名なる葦臺渡は、皆な人の知る所なり。  
 今、鐵橋はこれに架して、直ちに遠江國に入る。



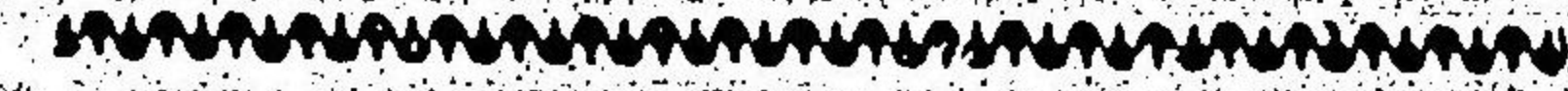
遠江に入れば地形峻河國とは稍趣を異にし小丘陵多く臺地また砂な  
からず。海岸とは稍離る。御前岬はこの小丘陵の海に盡くる所にあり。  
岬端に燈臺あり。岬の西は平滑なる砂濱にして所謂遠州灘の浩蕩澎湃を  
見る。

金谷町は人口七千を有す。徳川時代に於て獨り旅客を顧客として生活  
したる地なるを以て今は對岸の島田驛と共に著しく衰退せり。  
五和鑛泉は停車場の北二十五町旅館湖月軒。停車場より二十町餘あり。  
小夜の中山太平記の俊基朝臣の古蹟なり。停車場より二十町餘あり。  
僧正にして觀音菩薩を本尊とす。縁起の略に曰く古へ聖武帝の時當國に鴨平  
内左衛門と云へる獵夫あり。季子八太郎孝心深く只管父の殺生を止めんと欲  
し諫めて止まず平内左衛門遂に之れを雪中に殺す。妻某痛く之を悲み狂死し  
て異鳥に變じ屢々人を害す。來之れを蛇身鳥と呼び、恐るゝと甚し。時に三位  
中将良政勳を奉じて平内左衛門始めて前非を悔ひ佛門に入る。八太郎に月小夜姫と  
す。是に於て平内左衛門始めて前非を悔ひ佛門に入る。

云へる姉あり。其政其孤獨を憐み亡きもの爲めに一字を營み本願の觀世音  
を安し折柄當地遊歴の行僧正を請して開基と爲す。後一つの梵鐘を鑄立てた  
るに撞座の傍らに摩訶として鏡の形顯はる。是則ち玉と云へる嫉妬深き婦人  
より鐘を鑄んとて納めたる鏡の鏡化せざるものなれば若之れを撞くとときは現  
世に福を受くるとあるも必ず無間地獄に墜落するの因縁あり。故に之を無間  
の鐘と云ひ遂に毀て淡ヶ嶺に埋め其斷片を今尙本寺に蔵む。又一婦人あり姪  
の遺に已に臨月となりしに暴漢の爲めに挑まれ逃れんとす。一刹那に來り暫時石  
に死す。此後弘法大師東遊の時錫を此寺に駐め供養を營み石に佛號を刻し幽  
魂を弔ひしに功大和國恩智村刀研源五郎に備はれ中圖らず宿仇を果したる  
と命く。是れ後大和國恩智村刀研源五郎に備はれ中圖らず宿仇を果したる  
と云ふ。久延寺夜泣石共に停車場より一里餘なり。

金谷町より大井町に沿うて海濱に至れば海に瀕して相良町川崎町あり。  
後者には榛原郡役所あり。相良町には相良石油坑あるを以て有名なり。  
これより御前岬へ三里。





金谷の次驛は堀の内驛。この驛を距る少許にして隧道あり。此隧道を穿る山は即ち小夜中山の險にして東海道をたどれば日阪峠あり。此驛の掛川町は今小笠郡役所の所在地にして人口八千地方の一小中心を爲す。町の北端に今川氏眞の居城址あり。

遠江の東南即ち此附近には製葉茶産にして茶園渺茫とし際涯なきを見るべし。秋葉山へは此地より十里餘。

掛川の次驛は袋井。

可睡齋は應永十四年の草創なり。明治六年神佛混合を廢せし時秋葉山三尺坊を此寺に移して以來鎮火の功德ありと稱せられて賽者多し。

袋井より東北に岐る一街道あり。即ち信州街道にして北進三十里青







金谷の次驛は堀の内驛。この驛を距る少許にして隧道あり。此隧道を穿てる山は即ち小夜中山の險にして東海道をたどれば日阪峠あり。掛川町は今小笠郡役所の所在地にして人口八千地方の一小中心を爲す。町の北端に今川氏眞の居城址あり。

遠江の東南即ち此附近には製業茶盛にして茶園渺茫とし際涯なきを見るべし。これ即ち静岡縣の茶業なり。秋葉山へは此地より十里餘。

掛川の次驛は袋井。

可睡齋は應永十四年の草創なり。明治六年神佛混合を廢せし時秋葉山三尺坊を此寺に移して以來鎮火の功德ありと稱せられて賽者多し。

寺は禪宗にして一名萬松山と稱し、山の中腹に在り。秋葉三尺坊總本殿及中學林あり。山の頂上に燈明臺ありて遠く海を望み、満山の老樹泉石頗風致を具へ、文士雅客此地に来る者必ず參詣す。停車場より二十八丁。袋井より東北に岐る、二街道あり。即ち信州街道にして北進二十里青



崩峙を経て信州に入るものなり。此間に周智郡の中心地にして且つ郡役所所在地なる森町あり。袋井より二里二十町にして鐵道馬車の便あり。

森町は人口九千を有し遠江國東北部の一名邑たり。

秋葉山は國の北方に位せる山にして秋葉神社を祭り靈驗顯著なる道場

として名あり。此地に赴くには前記袋井より信州街道を森町に至り、これ

より北に折れて丘陵起伏せる間を行く。森町より三倉まで二里なり。此

間車を通ずれど二人曳ならでは不便なり。三倉よりは全く山路にて車を

通ぜず、犬居坂下まで三里半なり。坂本は即ち秋葉山の麓にして旅店十數

軒あり。これより絶頂まで登路五十町。

絶頂に登れば眼下に遠江三河駿河を望む。遠州灘の盤のごとくなる天

龍川の帯のごとくなる濱名湖の美しき實に稀に見る好景なり。寺觀は昔

日に比して甚だ衰へだれど杉樹翁鬱として晝猶小暗く人をして眞に天狗







天龍川の岸に掛塚港あり。河口淺くして港と稱するに足らず。元來此港の如き内地に退却すること奇景を呈せり。

鐵橋を渡れば、天龍川と稱する小驛あり。これを過ぐれば遠江國第一の都會濱松町に至る。

濱松町は往古曳馬の里と稱せし地、人口二萬余を有し、東西十五町、南北十町、繁華なる市場多し。

停車場は町の東の郊外にあり。附近に帝國製糖會社、日本樂器會社あり。此驛十餘位。

名産に濱納豆、蒲燒、糸瓜等あり。

北端に城址あり。北端臺地にあり。天正五年徳川家康の築きたるものにて、町の吉晴を此に封じ、關ヶ原役の後、徳川氏に屬し、徳川氏の關東に移るや、豊臣氏、尾崎賜ふ。眺望頗る佳なり。城内に東照宮あり。社殿、佛堂、佛開あり。

この地に諏訪神社、五社、龍潭寺、鴨澤寺、普濟寺等の神社佛開あり。主として西方より賽するもの、取るべき道

路なり。町盡れに一の華表あり。三方、二俣等の地を過ぐ。里程すべて十一里餘。二俣以北は人車を通ぜず。

濱松町より三里にして、舞阪町あり。東海道中駿河の海岸を離れてより、路は唯平凡なる丘陵と平野との間を過ぐるのみにして、旅客はうたゝ倦怠を催すの時、ゆくりなく前に風光明媚なる濱名湖の漱澗たるを見る。誰れか襟を披いてこれに向はざるものぞ。汽車の過ぐる所は湖の海水と相接する部分にして、松影は松影と相映じ、白沙は白沙と相連りて、其の風光の美宛然、須磨子の海岸を行くがごとき心地せらる。汽車この松原を過ぎてやがて長き鐵橋にかゝれば、右は濱名湖の更にひろくひろがりたる上に北部の山嶺の碧を凝したるを見るべく、左には遠州灘の怒濤の地を揺かして來るを認め得べし。橋を渡り終れば新井町あり。







衣浦汽船會社あり。小汽船數隻煙を吐きてあり。これより海路は衣浦を經て多牛島をめぐり直ちに伊勢灣内を航して至る。此船位なり。二見ヶ浦に近し。旅客此便を利用せんと欲せば豫め會社又は其地の旅時に聞合すべし。又此岸より半島の諸島に寄港しこれより衣浦の條島に至る航路あり。この航路は前島の伊勢航路に師比武豐を過ぎり尾張の町中央に舊城址あり。今歩兵第十八聯隊の營所たり。兵營の表門と對して吉田神社あり。所謂吉田の天王なるものに入橋納豆と稱せられ盛なり。悟慎寺は淨土の名刹にて寺内製なる納豆は入橋納豆と稱せられ此地の名産なり。

豊橋停車場より豊川鐵道の一支線は岐れて北を指さす。重に豊川稻荷の参詣者を目的としたるものなれど三河の北部遠州の東部信州飯田地方に赴かんとするものは此の線路に由るべし。長さ僅かに十七哩四鎖にして長篠を終端驛と爲す。

東海鐵道は新居より二川驛(驛より十五町)岩屋觀音あり堂は絶壁の上にあり。汽車より見ゆを過ぐれば地は全く三河國に屬し忽ちにして豊橋市の瓦葺粉壁を前に認む。

豊橋市は舊時吉田と稱し松平氏七萬石の城下今の名に改めたるは維新以後なり。静岡濱松名古屋と共に東海道中の都邑にして其繁華の度にこれ種々の差はあれ其地形其發達の状況等皆相似たり。北に七八里乃至十里にして山嶺を帯び南に二里にして沙濱より成れる海岸を控へたるさるなど皆同じ。而して街道は東西に通ずる東海道を主線とし南北に通ずる伊那街道別所街道渥美半島街道等縦横に相交す。町の廣さ東西十八町南北八町人口二萬二千を有す。町の北方を豊川の一流れ一里にして海に入る。此の水路を利用し伊勢神社港に達する汽船あり。

此汽船は伊勢參宮には甚だ便なり。先づ停車場より豊川河口に至れば其處に